863
239

苔の石ふみ

全

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用

863-239

豊受

苔の石ふみ　狂歌の部

月隈　いろは順

一立斎　廣重

石川　猪兎

萩の屋裏住

亀の　羊子

橋　市

花の　下遊

已有雲寿

已人亭　光

國立圖書館
昭 24. 3. 29 和
寄贈

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用

生佐洋ともいふ

若狭　三熊

俗称洋次郎ともいふ　書画を能くし人となり恬淡

疾の屯魯兼

俗称洋次郎ともいふ　旧幕府代官にて世々帝都と共に

梅　亮

名は景久　通称源次郎　家業と傍ら詩文を善くす

本町新書人

俗称洋次郎ともいふ　南鍋町に住す

倭文織の雅翁

名は武重　称大久保平右衛門と改む　旧幕府代官にて世々帝都と共に

文化十五年四月五日没す　法名は雅翁院殿文誉義道居士　墓は浅草誓願寺にあり

手柄岡持

名は恒　通称は伴平　別に岡持と号す　幕府の御用達町人にて

没す　法名は義勇院殿忠誉義道居士　墓は浅草誓願寺にあり

迫松門左衛門

名は信盛　通称は平馬　牧野氏平安壱岐守忠精に仕へ

後く亮保九年十月廿一日没す　法名は松門院殿義誉信道居士

淮南叟　翁満

河合氏　俗称洋次郎　家を相模に移す

神田香魚

武蔵氏　名は忠司　通称は伴蔵　香魚と称す　神田橋門外に住す

洲崎園江左

江戸の人　姓は源　名は左内　通称は大吉　江左と称す　神田橋門外に住す

文政十二年十月　日没す

加茂　季鷹

季鷹は京都上加茂社祠官之山本氏四世位下安房守正世と云ふ　別号雲伴亭と云ふ　和歌

に秀で　名あり　天保十三年九月十八日没す　法名は雲伴院殿季誉義道居士　墓は京都

紫野大徳寺にあり

画賛人額翁

通称は安右衛門と云ふ　南畝と共に狂詩を善くす　天保十一年十月

八日没す　法名は額翁院殿画賛日観居士　墓は浅草誓願寺にあり

冠春居是貫

俗称洋次郎ともいふ　名は行義　春居と称す

仮名垣魯文

俗称野崎藤吉と云ふ　初め浅井氏を称す　戯作者にて　笑魯文　狐と道人と号す　又条亭花咲門人と

称す　書画を善くす　文政元年八月五日没す　法名は花咲院魯文日成居士　墓は浅草誓願寺にあり

四谷居春良

通称源次郎と云ふ　旧幕府代官にて　名あり　文化八年四月廿六日

没す　法名は春良院殿義道日観居士　墓は浅草誓願寺にあり

吉田一池

通称幸蔵と云ふ　本所中之郷に住し　南鍋町に住す　書を善くす

竹本　楚之丞

楚之丞は浄瑠璃語り　南鍋町に住す　義太夫節を語る　文政元年八月五日没す　法名は楚之丞院義誉

宝田寿助

寿助は江戸神田の人　姓は源　名は吉修　通称は寿助　俳名は寿老人　狂言作者二代目松井幸三郎門人にて

大小物狂言を能くす　嘉永元年二月十九日年四十二

洗濯機重宝

中村氏名は英稔　通称は和泉　和歌を善くす　本所松坐町に住す　著述を好む　又和歌を能くす　文

政五年六月二日没す　法名は重宝院殿和泉日観大居士　墓は浅草誓願寺にあり

二代目雪岱

雪岱山崎嘉助と云ふ　小川古石楊を能く　町方の人　著述等あり　和歌を好む　又俳句を能くす　文久二年

七月廿三日没す　法名は雪岱院殿嘉誉日岱居士　墓は浅草誓願寺にあり

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

竹木津賀古史　　竜称洋あるじ尚絅賀古史学を教行り

桑揚屋千刈　　熊国氏竜称洋あるじ演芸を任し演芸を名北義を広く尚絅教会を教行り

身　信仁子存教義
花　元禄五酉年逝去　　あん人才何人あるや洋あるじ学教会を教行り

猫　かぬろ　　此猫八俳句修行の為江戸北鍋猫あり文政十一年十月二十九日を以て俳川宗元院に葬り千所木石北石を建教会を維持しもれるかぬ柯あれ猫あるや洋あるじ

中村歌右衛門　　俳優梅玉と京大坂兵人知名俳優名前と物と京俳優名と諸百戯園と集れ尚的俳修中まく兵人此称あり天保九年七月十三日を以て死れ辞年三十一俳川浄心寺に葬り埋葬れ

魚屋北渓　　俳名初五郎と京集を称春又養園とこれ尚的浮世画を教行り四谷数ケ横丁住し浮世絵を移る称永三年四月廿日を以て死れ辞年五十六芝宗法寺に葬り埋葬れ

歌川豊廣　　竜称俳優俳号と京大坂兵人知名俳優名前と物と京俳優名と諸百戯園と集れ尚的俳修中まく兵人此称あり天保九年七月十三日を以て死れ辞年三十一俳川浄心寺に葬り埋葬れ

池亭椿葉　　何人あるや竜称洋あるじ尚的教会を教行り

狐亭竹葉　　狐亭氏竜称洋あるじ尚的教会を教行り

弥生屋鸚鵡　　代々屋号四方側の判者

山遊　高尺　　山口氏竜称洋あるじ石川み住氏武蔵之教会を教行り

生　　何人あるや竜称洋あるじ

雲楽亭仙圭　　竜称洋あるじ尚的教会を教行り

文静堂　　書家之竜称英住所洋あるじ

天民　廣如　　竜称俳画廣吉と京称百俳名之後江戸より多く四若数物を住し易を以く業とれ又教会を教行り

てい　老人　　小切谷氏竜称洋あるじ江戸日本橋より住し尚的教会を教行り文化十三年三月廿八日を以て死す汐年五十六麻布今井町若学寺に埋葬れ

朱来　葵江　　名ハ景貴字道文竜称山修卿舶と京四若より住れ旧幕府時先手与力あり尚的教会を教行り
廿四ケ寅政十二年十二月十二日を以て死す青山善光寺に埋葬れ

山陽春山陽　　竜称俳諧家門と京芝将監橋より住し画家之教会英教会を教行り
あるじ墓ハ芝三光坂泉教寺中に有り

山東京伝　　名醒字雨星竜称伝蔵と京醒斎又山東京伝称住しるじ文化十三年九月七日死れ年五十六ケ国回向院に埋葬れ

山　蝶　　何人あるや竜称洋あるじ

玉樹軒　木枝　　竜称洋あるじ尚的教会を教行り

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

和泉屋　吉郎

森羅万象　六義

歌聖　蜀山人
三神　智恵内子
　　朱楽菅江

玉園翁　遊元

琴通舎　英賀

公　廉朱

画業　野文朱

蜀山人

紫檀楼　古森

森羅万象　萬象

紀氏　名称北川氏、後に改称又四方赤良と云、歌家名所名なり。稗史を作り又雑俳家を中興して世に称せらる。文政十二年六月六日死す。汐留一七七番地、光岡寺に埋葬す。

狂人多くやこの作者なり。

蜀山人　若山氏、大阪人、北御門より来る。書画共に妙手なり。狂歌は元より阿波の書かこ者にして、狂名を四方赤良と云ふ。文化四年六月廿七日死す。深川万年町正覚寺に埋葬す。

狂人多くやこの作者なり。

森氏　名称大田氏、後に改称す。通称七十五郎、本所に住す。狂歌に堪能なり。埋葬す。

名称杉山、後に改称す。通称九右衛門、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、四方赤良門人、狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、浅井氏、後に改称す。通称、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

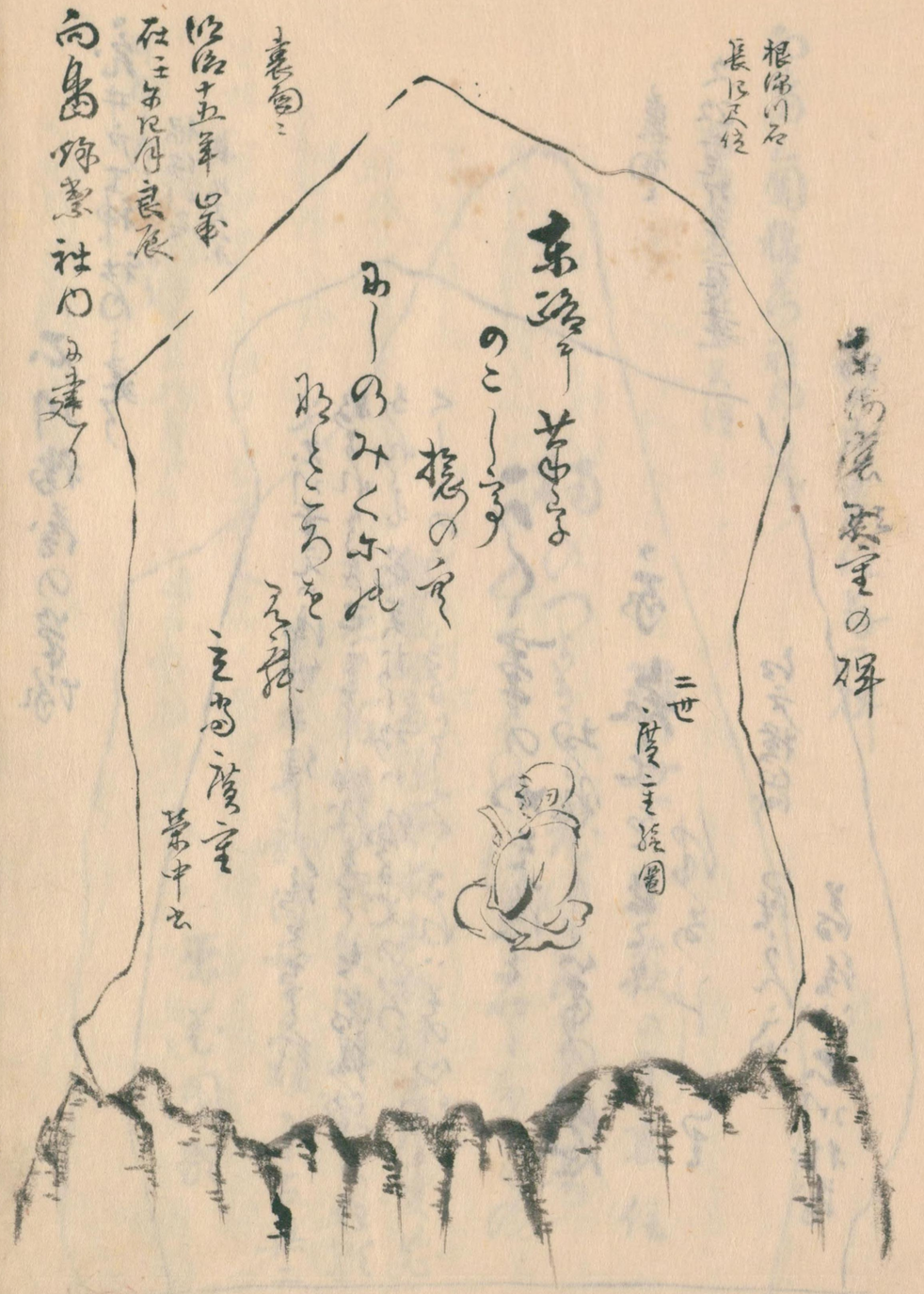
名称、平賀氏、後に改称す。通称、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、朱楽氏、後に改称す。通称、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、宿屋氏、後に改称す。通称、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、平秩氏、後に改称す。通称、後に改称す。狂歌は赤良門人なり。埋葬す。

名称、大田



苔の石ふみ狂歌の部

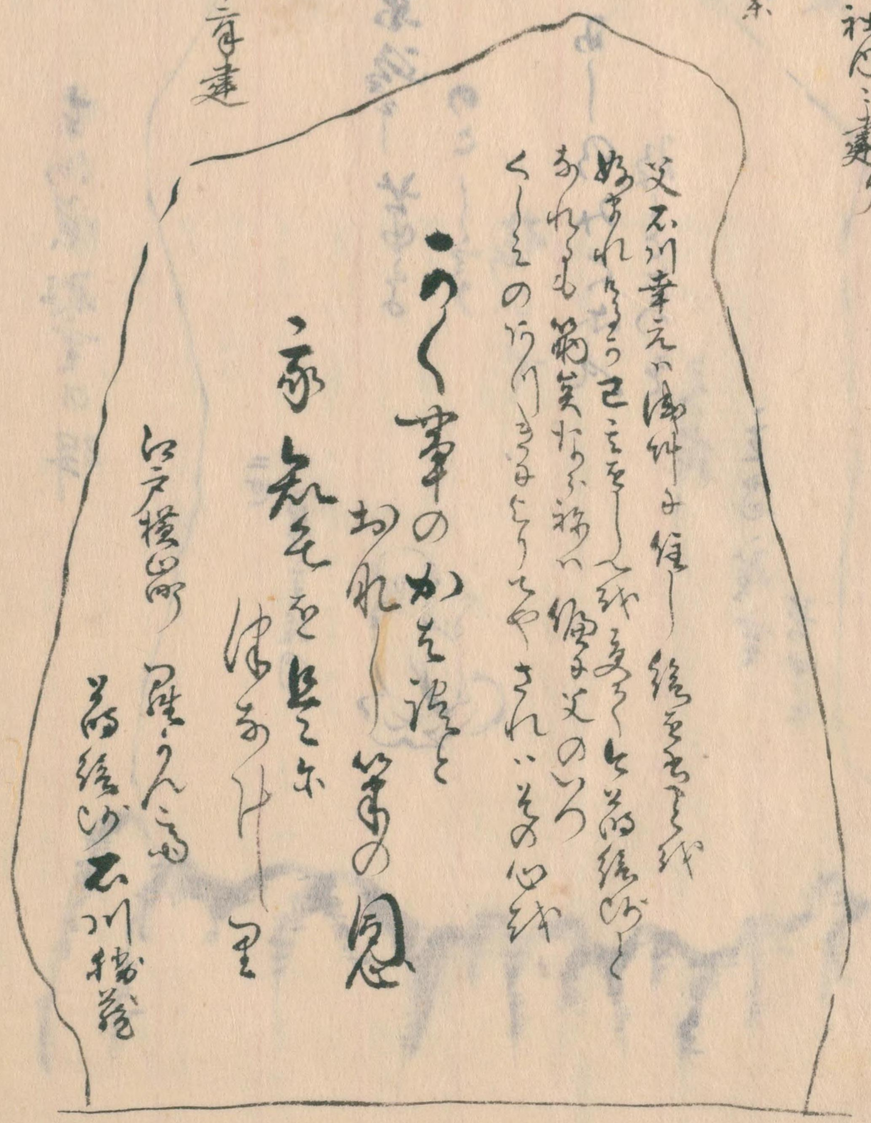
東路の苔のこしつゝ
根の奥
ふしのみくふ地
おくところを
主角廣重

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

石川雅望の墓塚

元井戸の神社の辺り

根岸川石
長九尺余



裏面

文政二己卯年春建

又石川幸元の法名を授けられもうしこと
ありれども筆なき物いかゞやとて
くしこのかりにまかりたり

うく事のかをしらぬ
おもしろき
春気をしるや
鶯の声

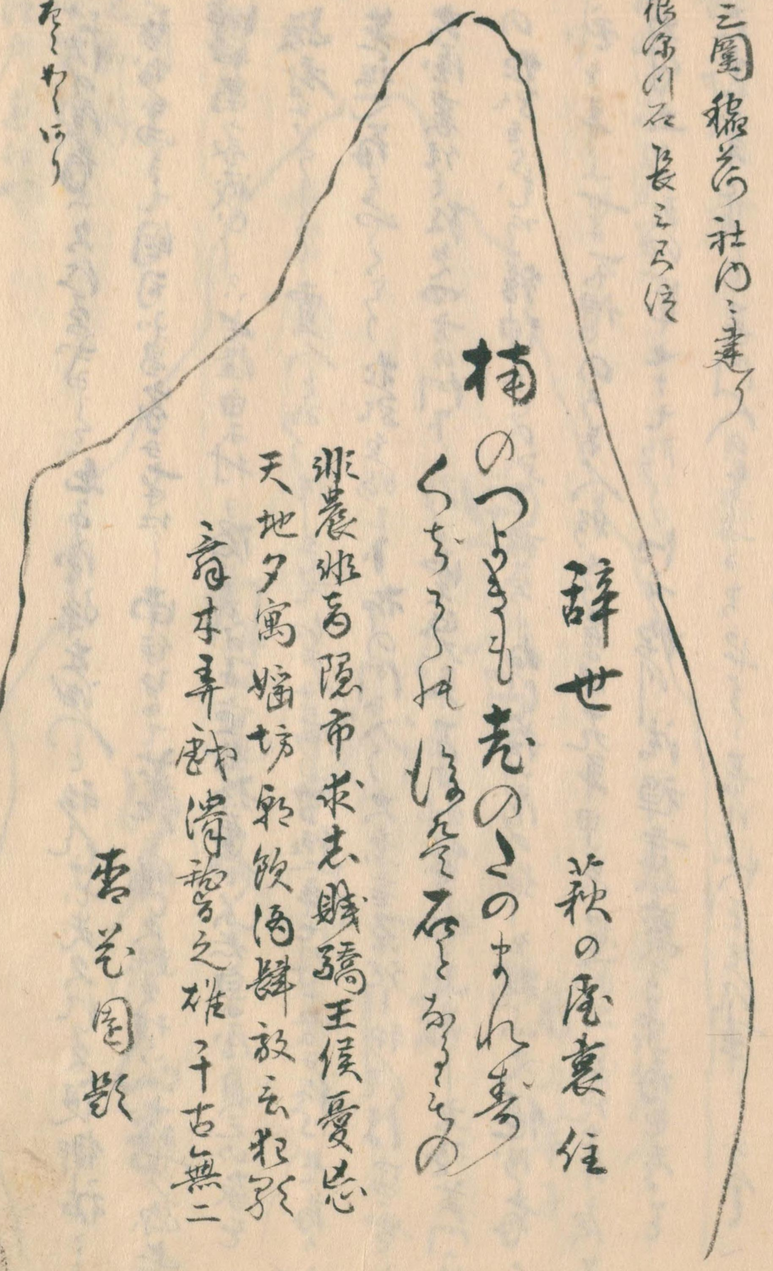
江戸橋四丁目 雅望

法名は石川雅望

萩の屋裏住者の碑

向島三圍稲荷社内の辺り

根岸川石長三尺余



萩の屋裏住

萩の屋

辞世

柿のつるもくもるもしぐれ

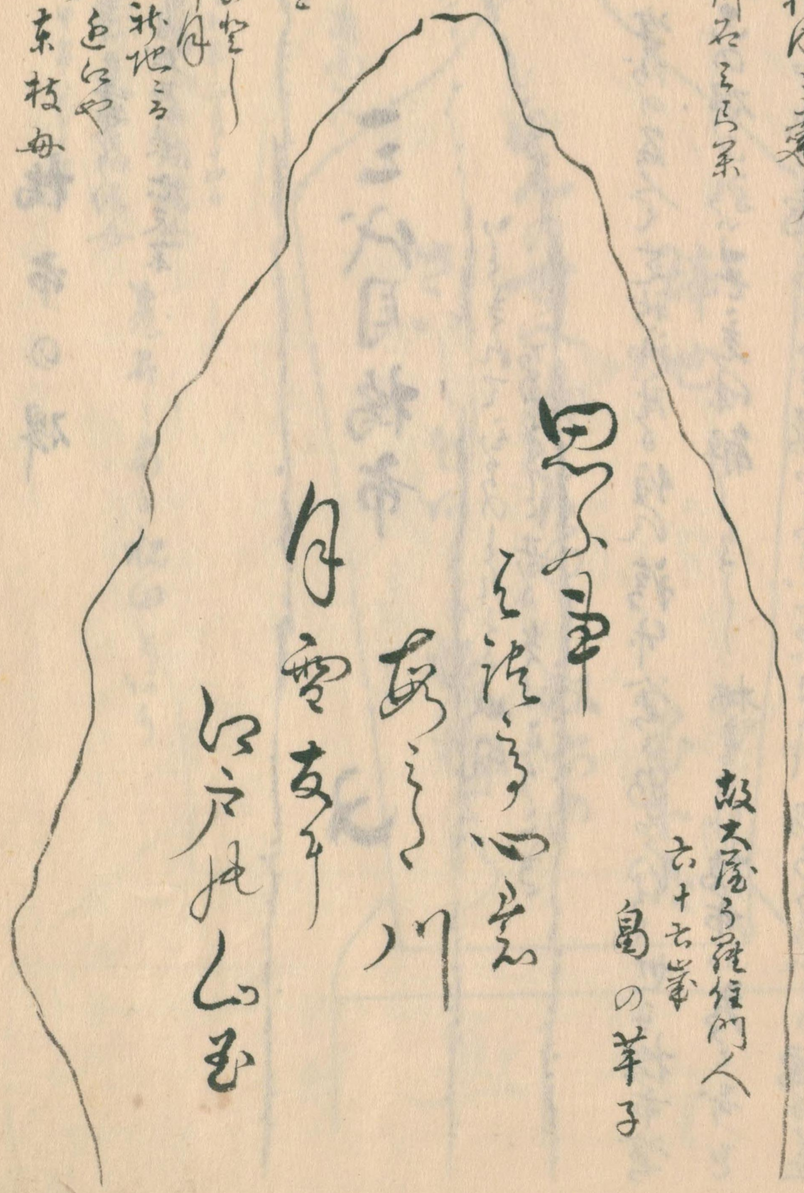
非農非商隠市求去賤驕王侯憂忠
天地夕寓嬉酒坊歌飲酒辞放言狂歌
音本善戯滑稽之雄千古無二

雪芝園歌

碑陰左の如し

苔の石ふみ狂歌の部

苔の石ふみ狂歌の部



島の羊子の碑

前口新狂四天王の一

根岸門右之馬策

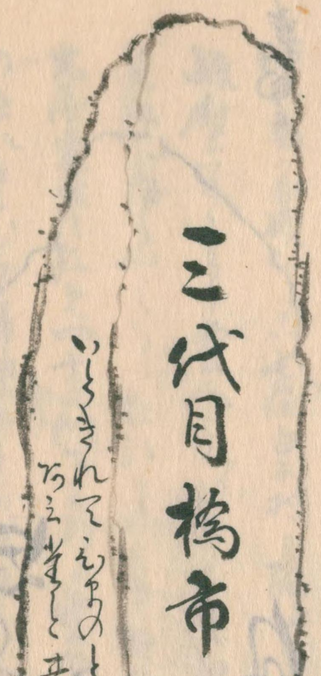
故大屋裏住門人
六十七翁
島の羊子

裏面之

三保ヶ浦の空
三千年
東都向柳地ニ而
江戸 色仙や
東枝 画

橋市の碑

向島長命寺ニ建ル
赤マダラ自然石長六尺余

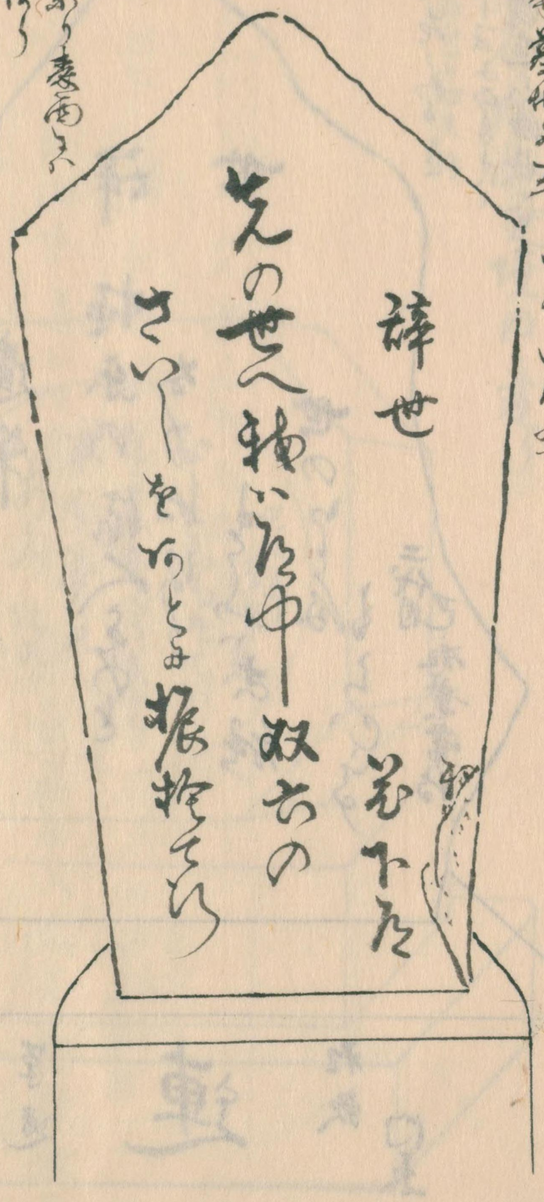


橋市ハ隅田の名々芝新柳屋ノ隠居ニて
とふ志の碑の裏ニ委しく解しるせり
始ハ〳〵山椒の擂木ヲ業トなしそれを
〳〵故かくの如き歌いくつも〳〵

橋市ハ隅田の名々芝新柳屋ノ隠居ニて世ヲ橋市ト号
とふ志の碑の裏ニ委しく解しるせり　橋市ハ寺ニ
始ハ〳〵山椒の擂木ヲ業トなしそれを　橋市ハ寺ニ
〳〵故かくの如き歌いくつも〳〵　狂名ヲ柳ノ下ニ

苔の石ふみ

浄川浄心寺墓地ニ在リ高サ四尺余

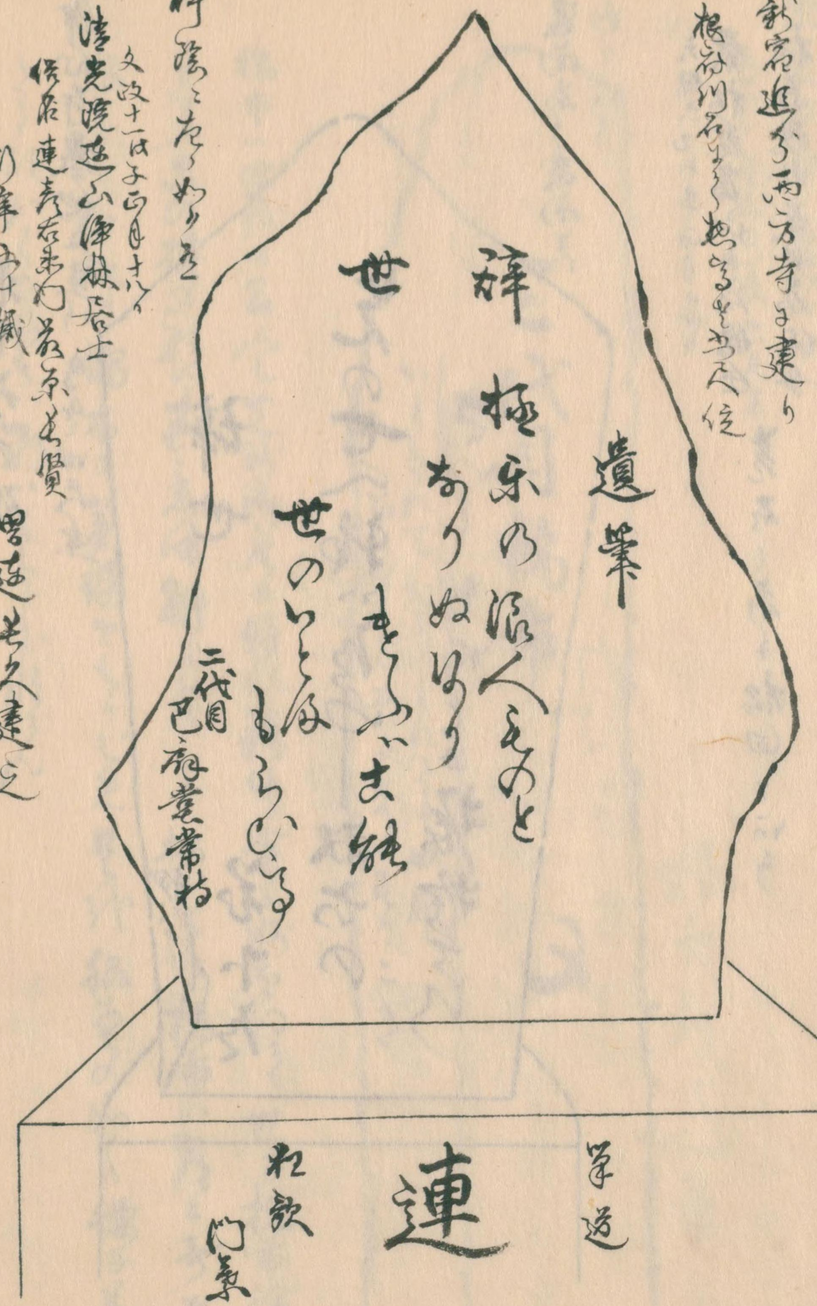


表ハ裏面ありて表面ハ
為ぬくなり

天保六乙未年四月十四日
栗杉院苔山自成信士
杉寿院妙栗日為信女
天保七丙申年八月十四日

先ず一前ハ杉田とかや

巴扇雲考好の碑



碑陰之考ぬりを

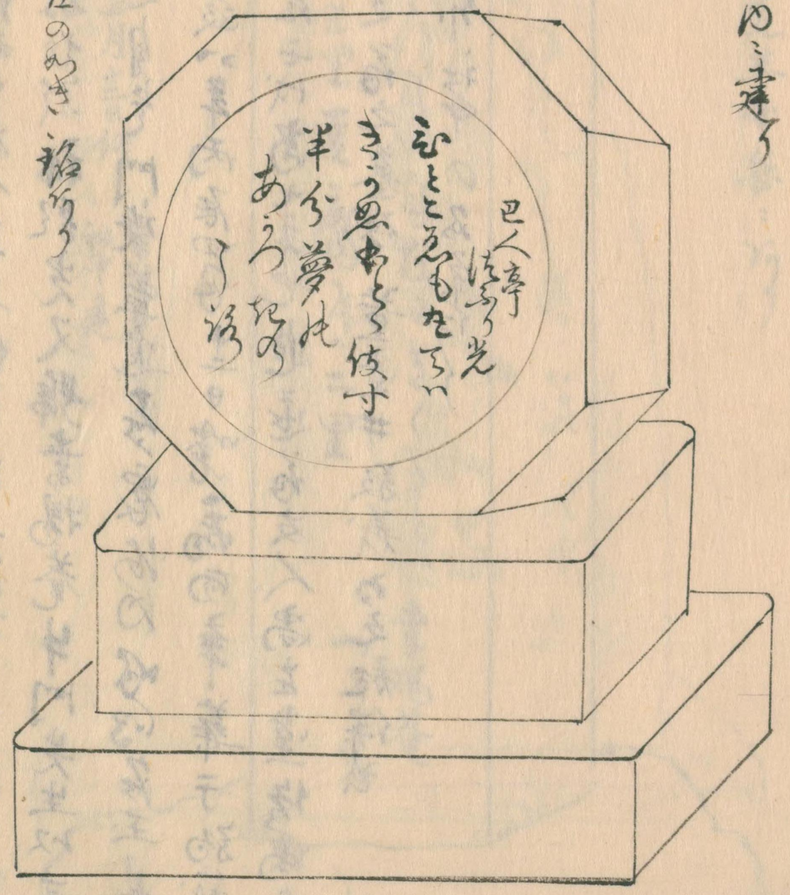
文政十一はつの月十八日
清光院道山伊勢居士
俗名 連表若栄門 行年五十歳

男連考久建之

巴人亭塔ふり光の碑

豹辺蓬莱町 陽春る境内に建ル

碧石高サ四尺位



裏面と左のかき 略ふり

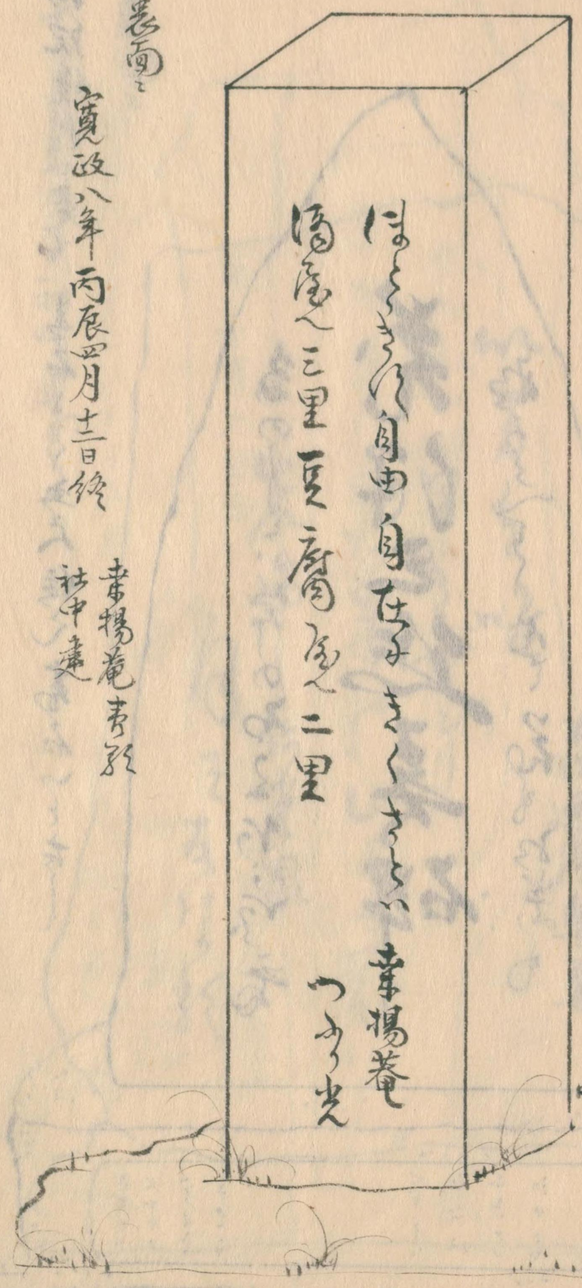
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

苔名諏之姓屋氏俗称宇右衛門 嘉文仕豊前豊生苔于亀井衛
寓居苔至中年好和歌称稲彦光又歸葉揚菴牛門先生以来
巴人亭之号與之自号門陵益進 寛政八年丙辰四月十日晩
碑室翁雖全寧政八年丙辰四月十日晩而葬于駒籠
瑞泰寺後山今茲壬戌 嵩七年也追遠苔友人高古堂後嗣ら
甚社中諸子諮之苔之墓碑董堂井敦義乃之記併也
まうすものなりし 外社中の名前略す

巴人亭苔光碑

日蓑里妙隆寺境内芝生小径にあり

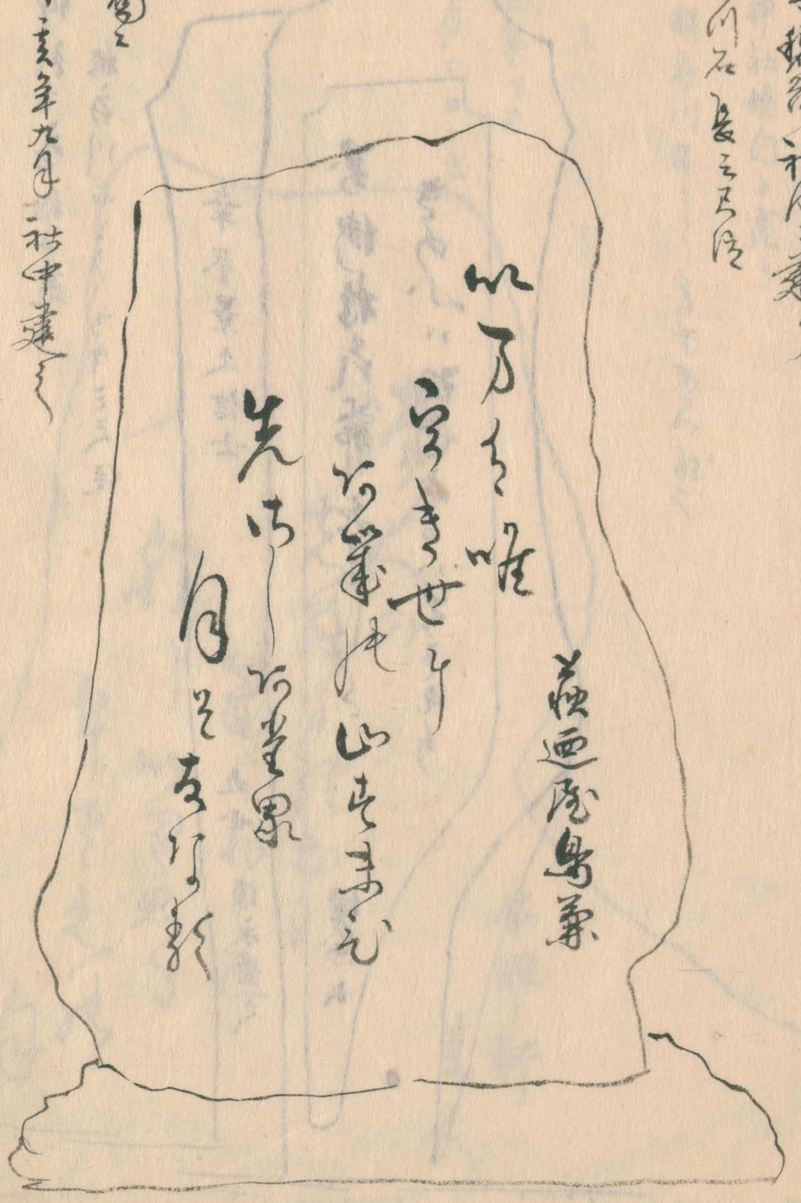
堅石二尺 高廿五尺位

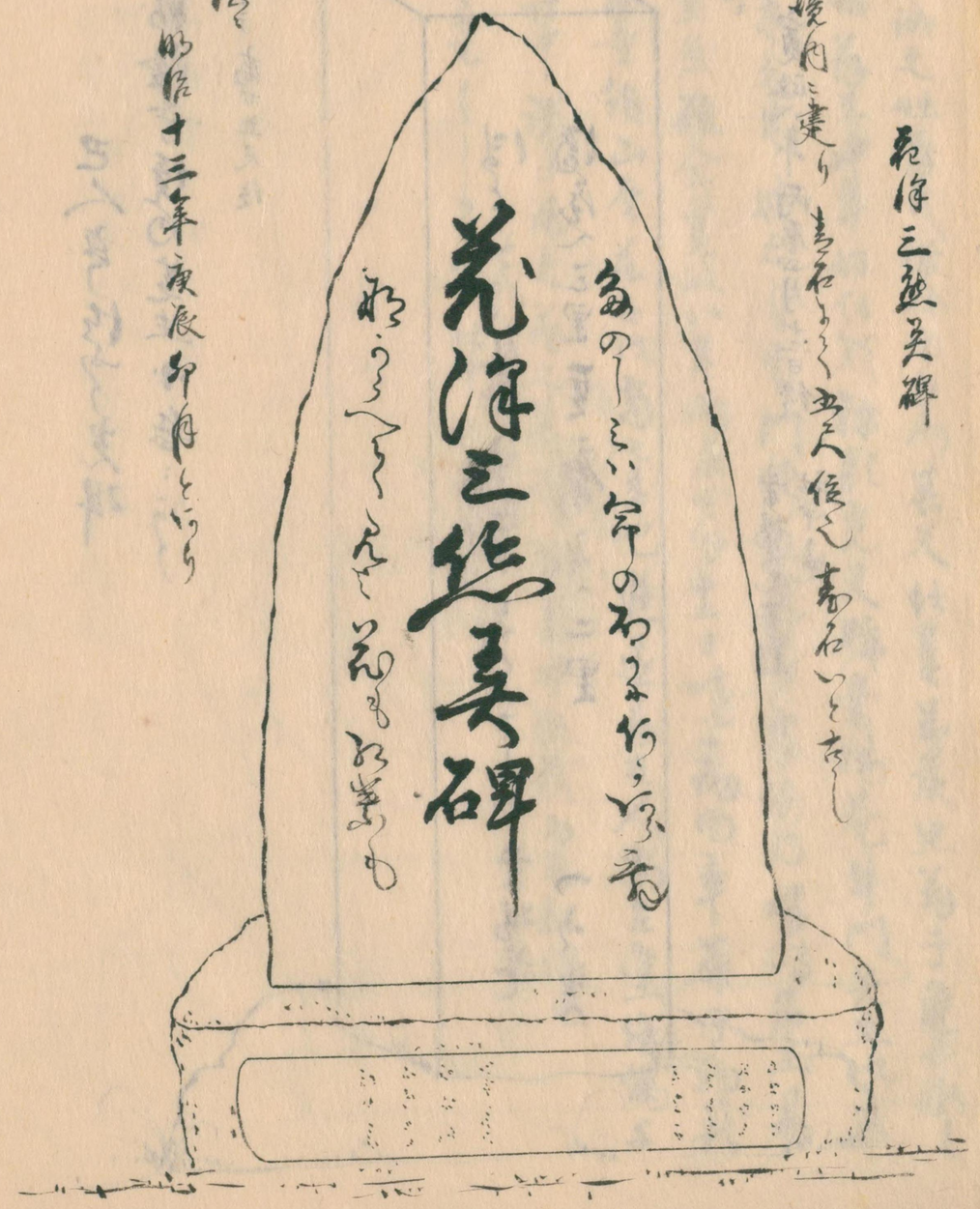


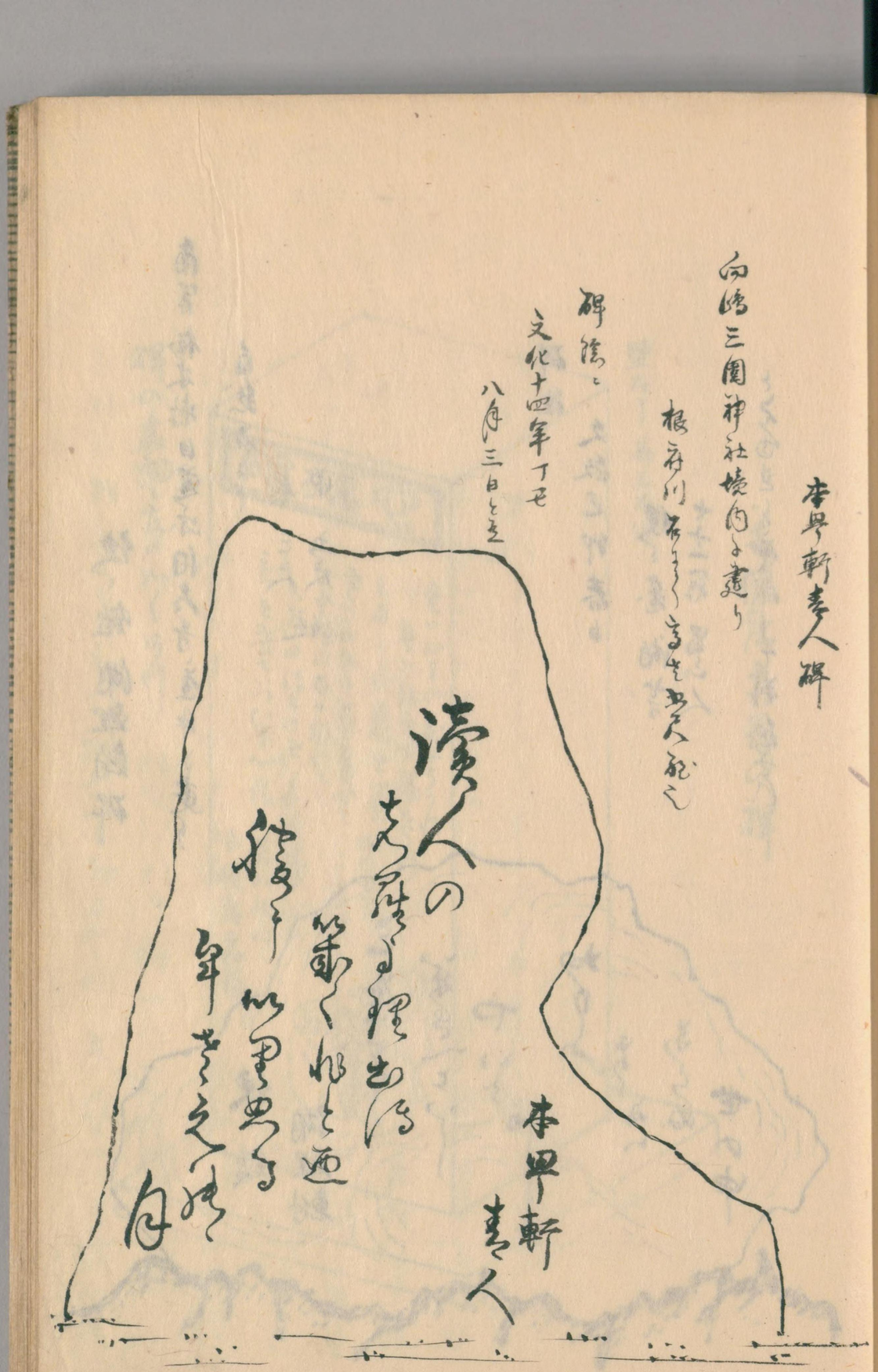
裏面に

寛政八年丙辰四月十日終 葉揚菴書於
社中蓮

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用







国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

便ち敏湖鯉魚碑

角宮村水村日蓮宗日秀寺境内に建つ

自然石なり

高　三尺

巾　九尺　位

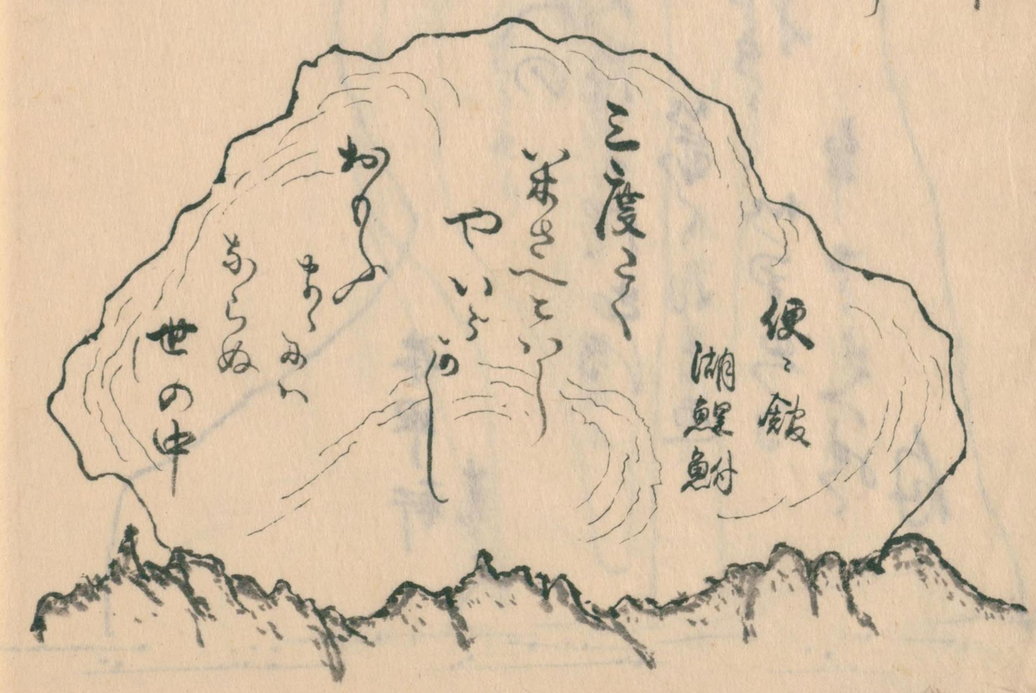
碑陰に

文政己卯春日

便ち敏湖世翁

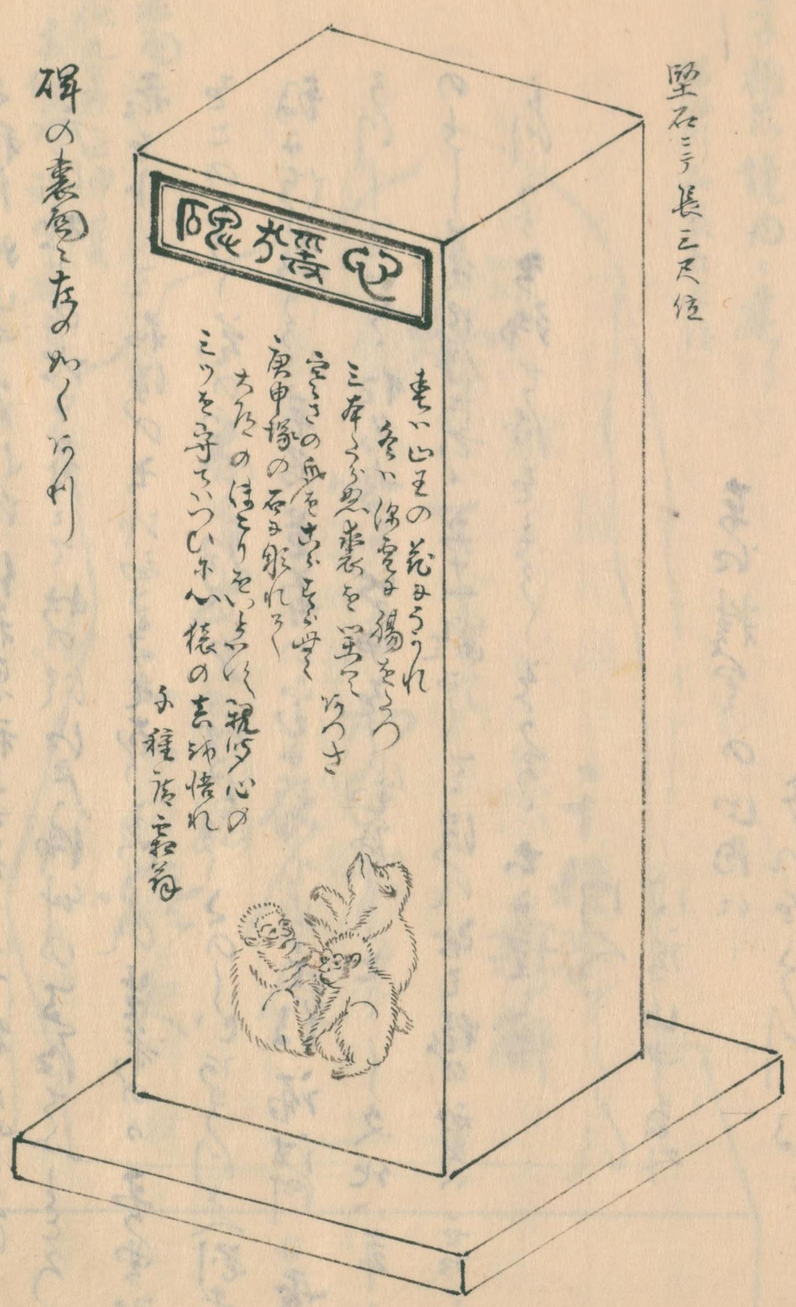
七十一翁　蜀山人

とある由なれど磨滅して判然せず



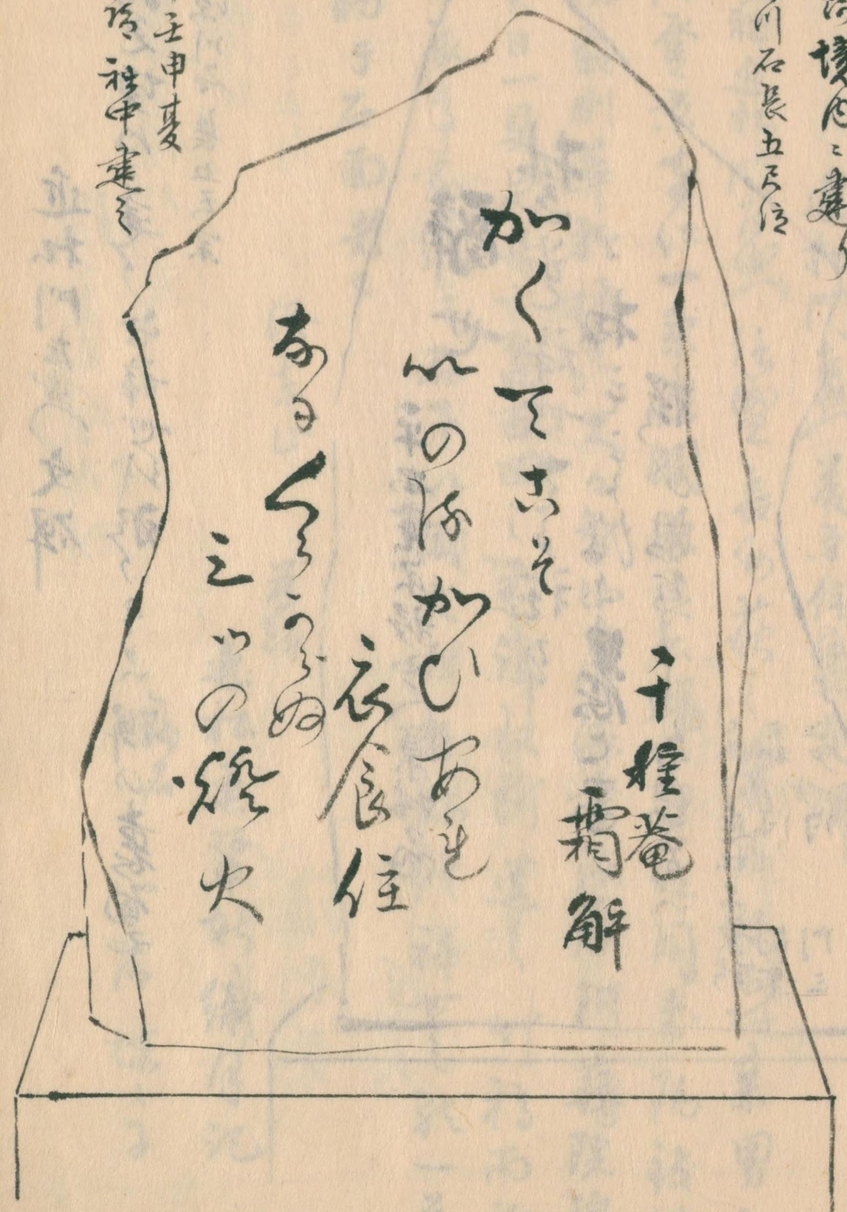
手種売翁の碑

堅石にて高三尺位



碑の表面と左のごとし

千種庵蜂斛



千種庵蜂斛の碑
玉子稲荷の境内に建つ
楊洲川石長五左衛

裏面に
文化九年壬申夏
千種庵 蜂斛 建之

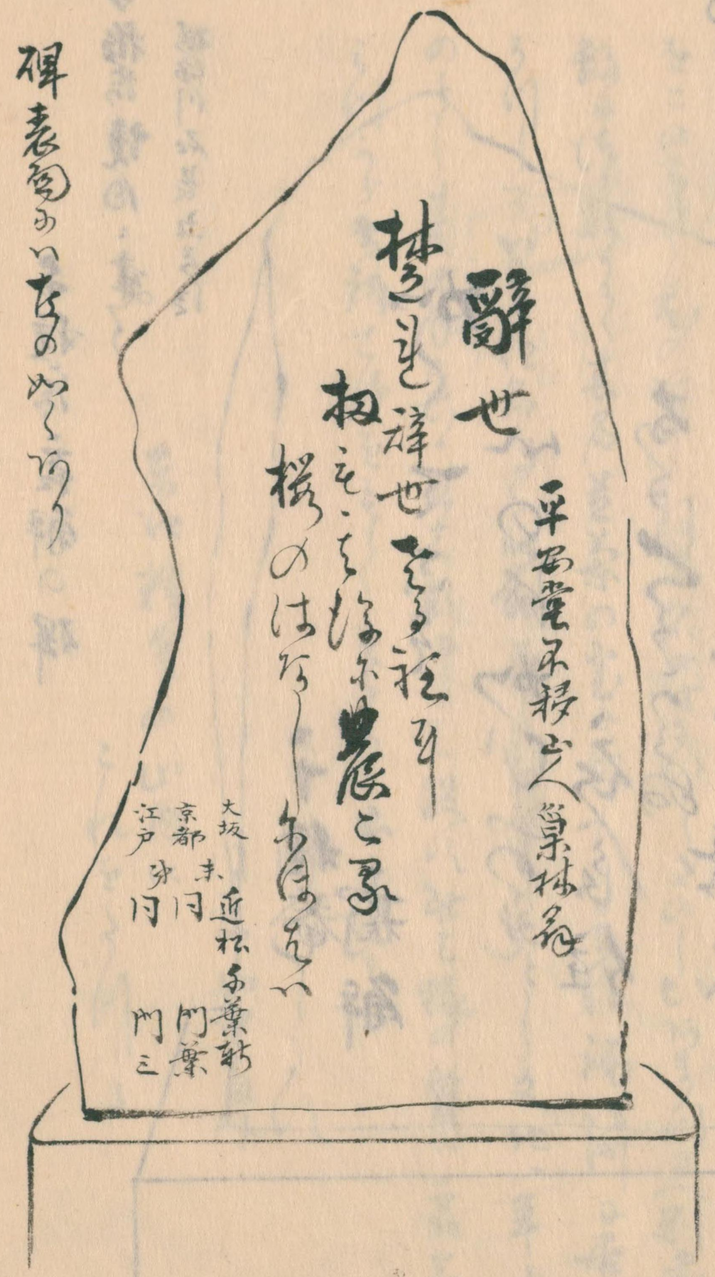
東江精室

門人
日高山中翁
の山内に
これをたつる

近松門左衛門文碑

柳営以史境内ニ建ル 辞世歌ノ碑

根岸川石長五尺余



碑表面のいきさつ

昌泙翁理学義伎雑誌中記

近松門左衛門墓 長州侯 伝盟文碑

曽祀近松門左衛門 往盟長州侯 伝盟文碑

陸奥京住一条禅閤兼良公賜篇云住同志務於

而寂則葬於槻尺々智山慶海寺法名阿蕣院穆

矣日一具足居士 南面回ら遠津松所選ら仲秋而於

松原等前納于石下ル樹文碑ヒ臨終辞世ら於一ら

勒于石面者ら

洛東山 芳塚

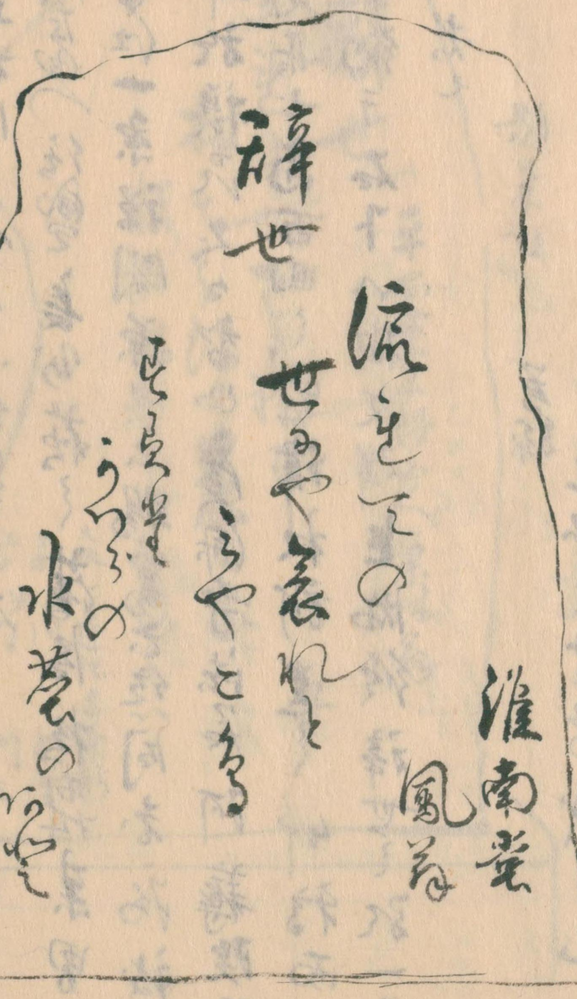
近松妻鞋軒織尼記

勲名 心居 諜ら

淮南雲風碑

向島木母寺境内に建つ

根岸の石
長三尺余



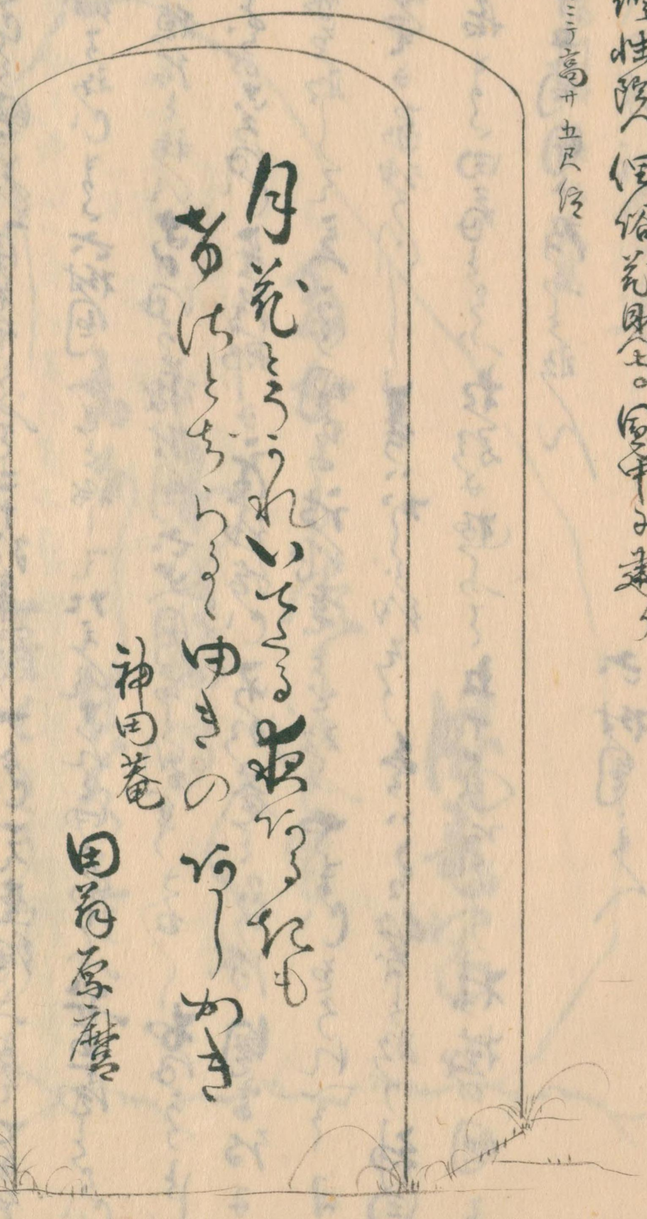
裏面

天保六未年六月建之

神田旅原九碑

日暮里修性院 俗称花見寺 境内に建つ

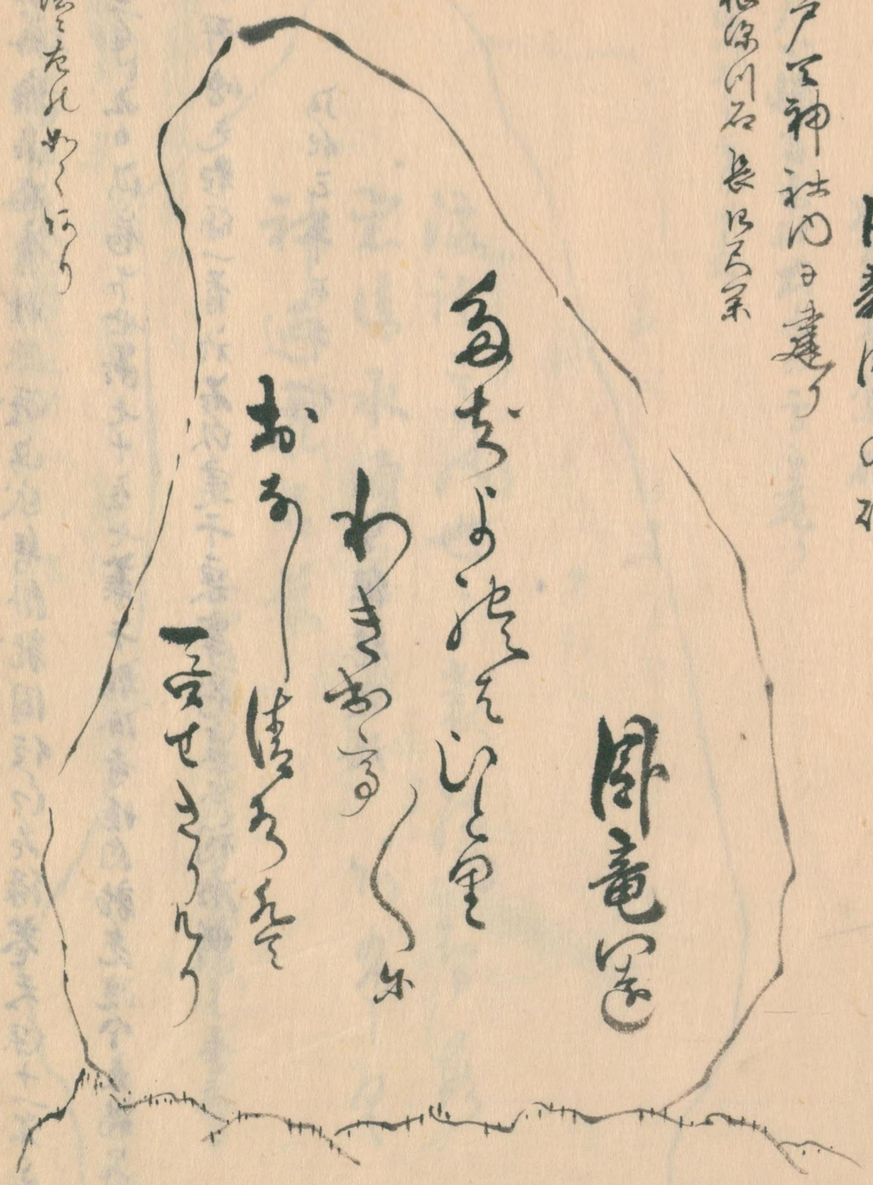
堅石三方高サ五尺余



裏面之文略之

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用



碑陰を左のごとくなり

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

寛政癸酉梅雪姓源渡辺氏号卯龍国信之名縁巻天保十一年庚子
十二月廿日病卒世壽七十五蓼于勤修寺境内勅光院今表墳茅生
家所傳之和歌一首於茲建于東寧寺境内祠廟側

弘化三年丙午秋

男徳澄謹誌

加茂季鷹解

陸前名戸八幡宮末社右手の方巨巌ノ

根ニ刻ミ名ニテ高千四尺餘

苔の石ふみ狂歌の部

滄海変桑田世の常なれど
変清水頃茂き巌
神垣乃名前

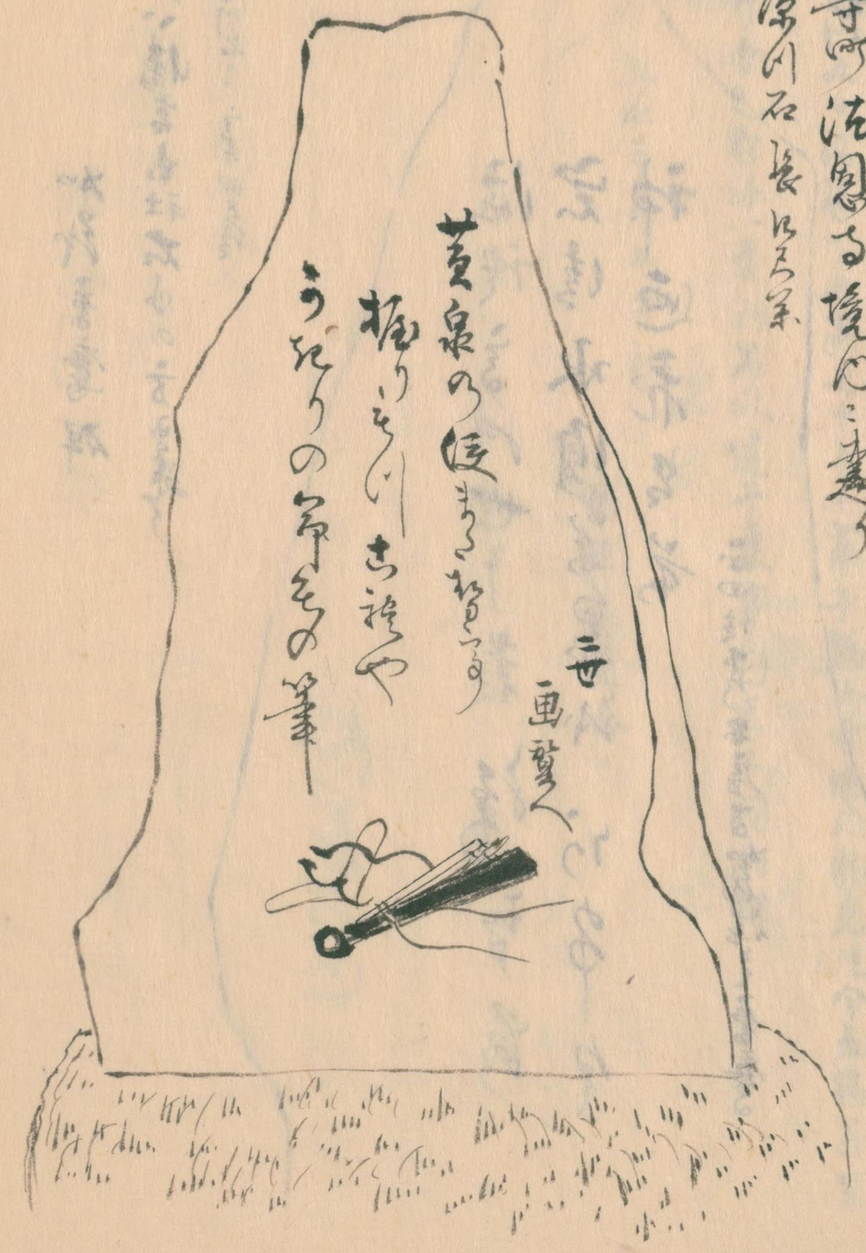
正四位下行大納言兼大宰帥藤原朝臣季鷹書

嘉永二
又政七甲申春二月下浣

二世画賛人の碑

谷中南寺町法界寺境内にあり

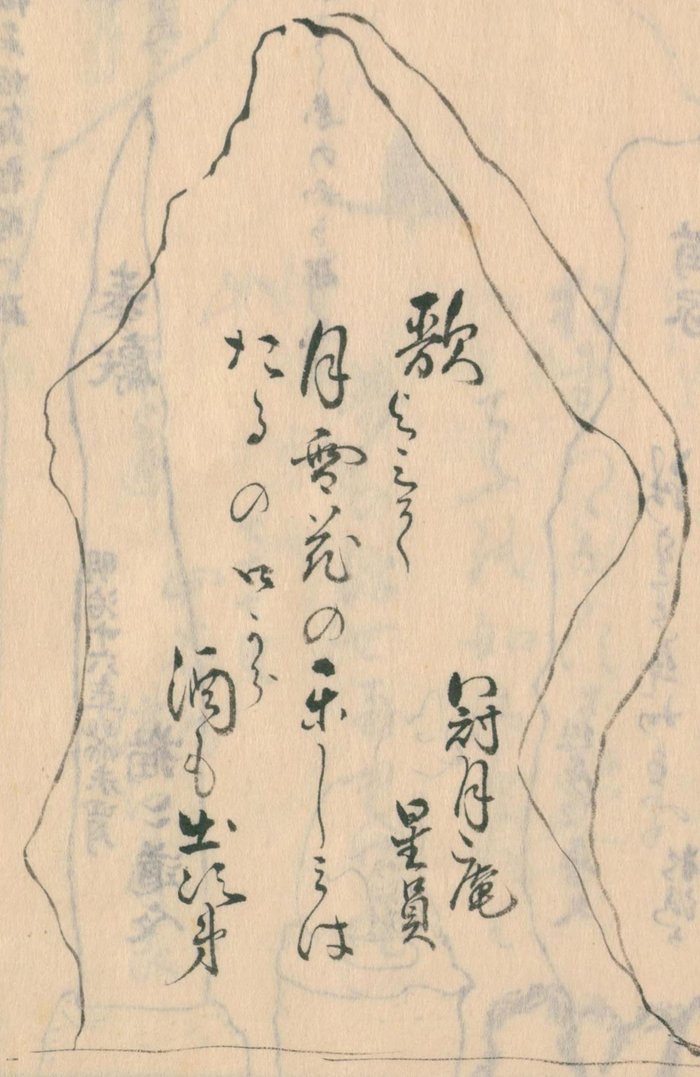
根岸の石長さ六尺余



冠月庵是員

向島木母寺境内にあり

根岸の石長さ六尺余



国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

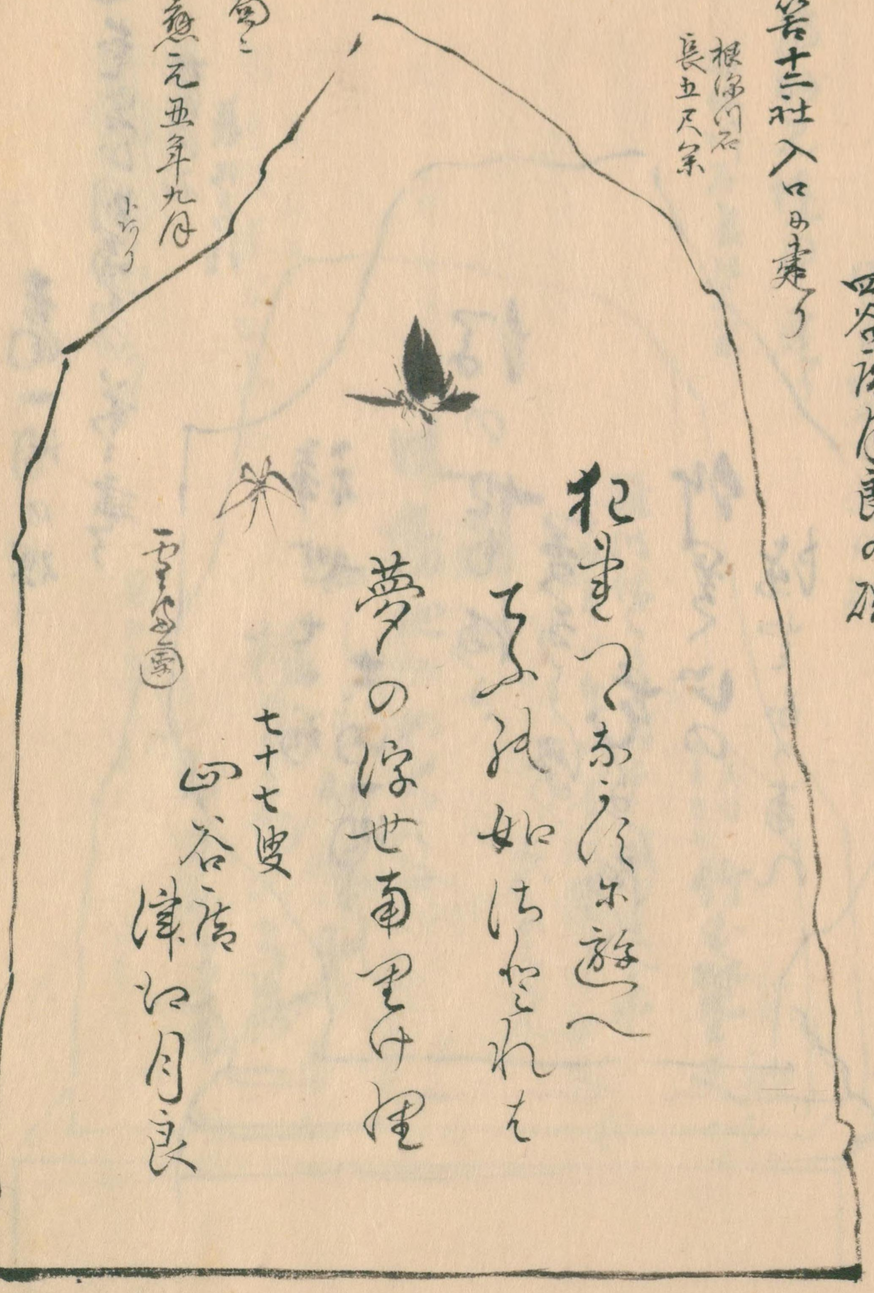
伝名拉家猫塚の碑

向島秋葉神社
境内ニ建ツ

四谷信良の碑

角筈十二社入口ニ建ツ

根岸川名
長五尺余



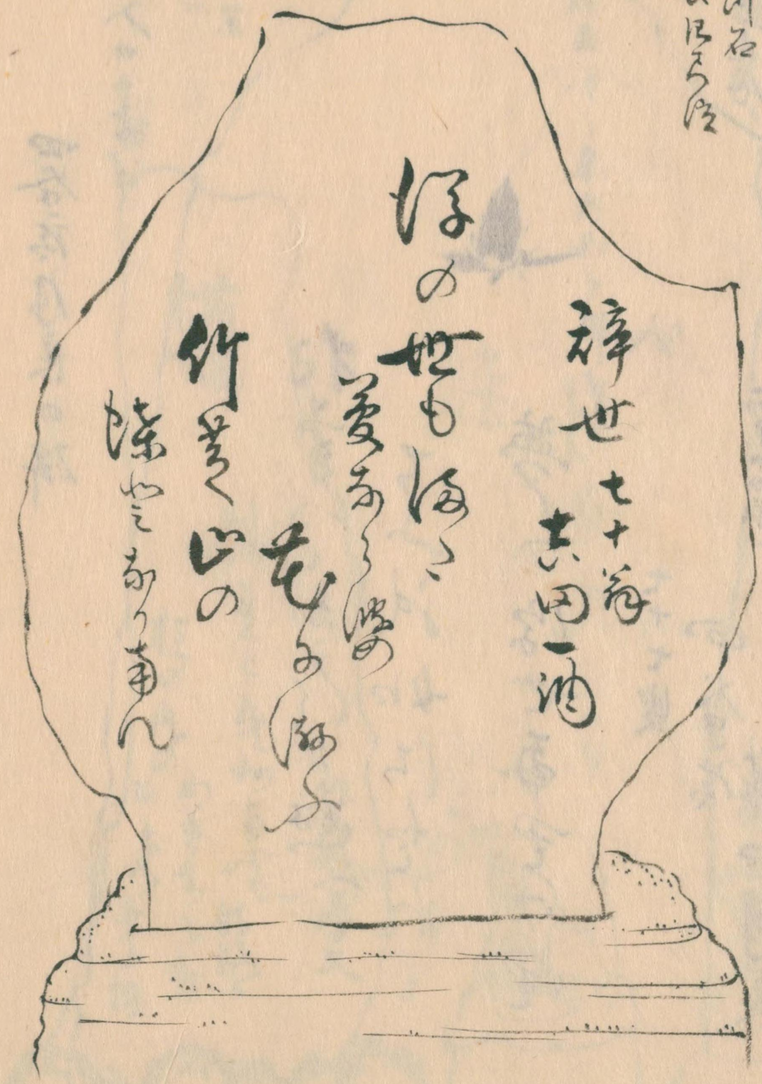
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

高一鴻の碑

芝葛岸山別荘の前に建つ

根府川石長さ六尺



朱本楚左史の碑

柿島城之境内に建つ

根府川石長さ六尺

裏面に左のごとく

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

文政六年
冬宗重の
建つ

華主院善光日秀聖士
宗八月七日

高き夫とまれしかなう
和ものらしうまれ
いくまでも

玉川堤御橋
七十六番 重

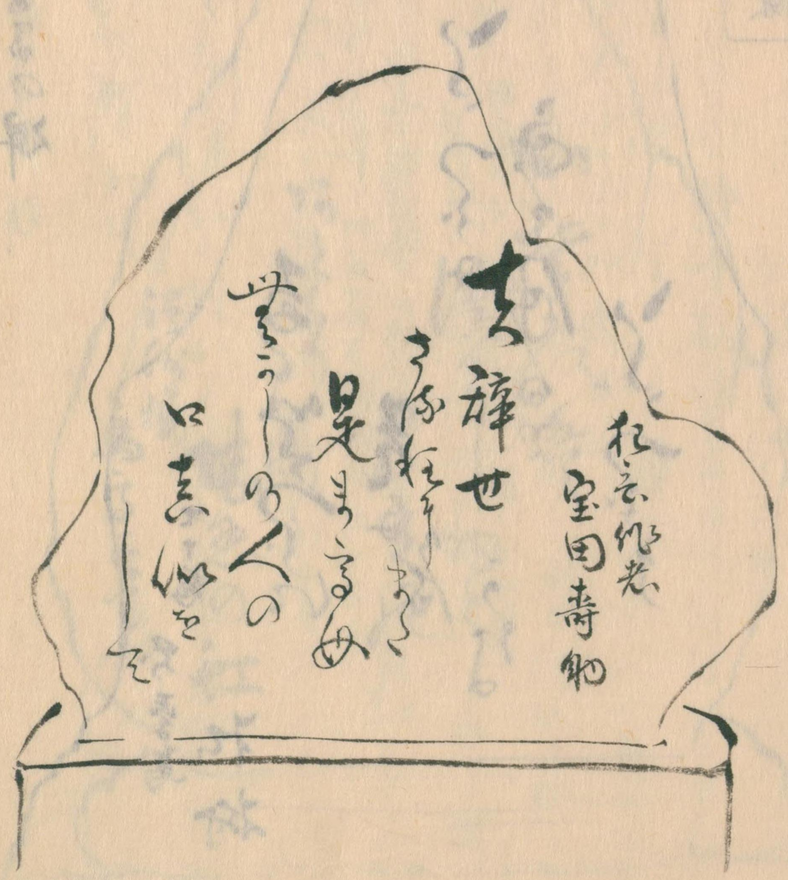
冬の夜雪おもしろき名なるべき
風まちがいまじ 秋の 夜ふかし
門葉の人々まうでて
建つるなり
坂原

朱のまの
ゆうべかりさせん
雪晴

宝田寺の碑

柿島妙文橋の事
根岸門石長三尺余

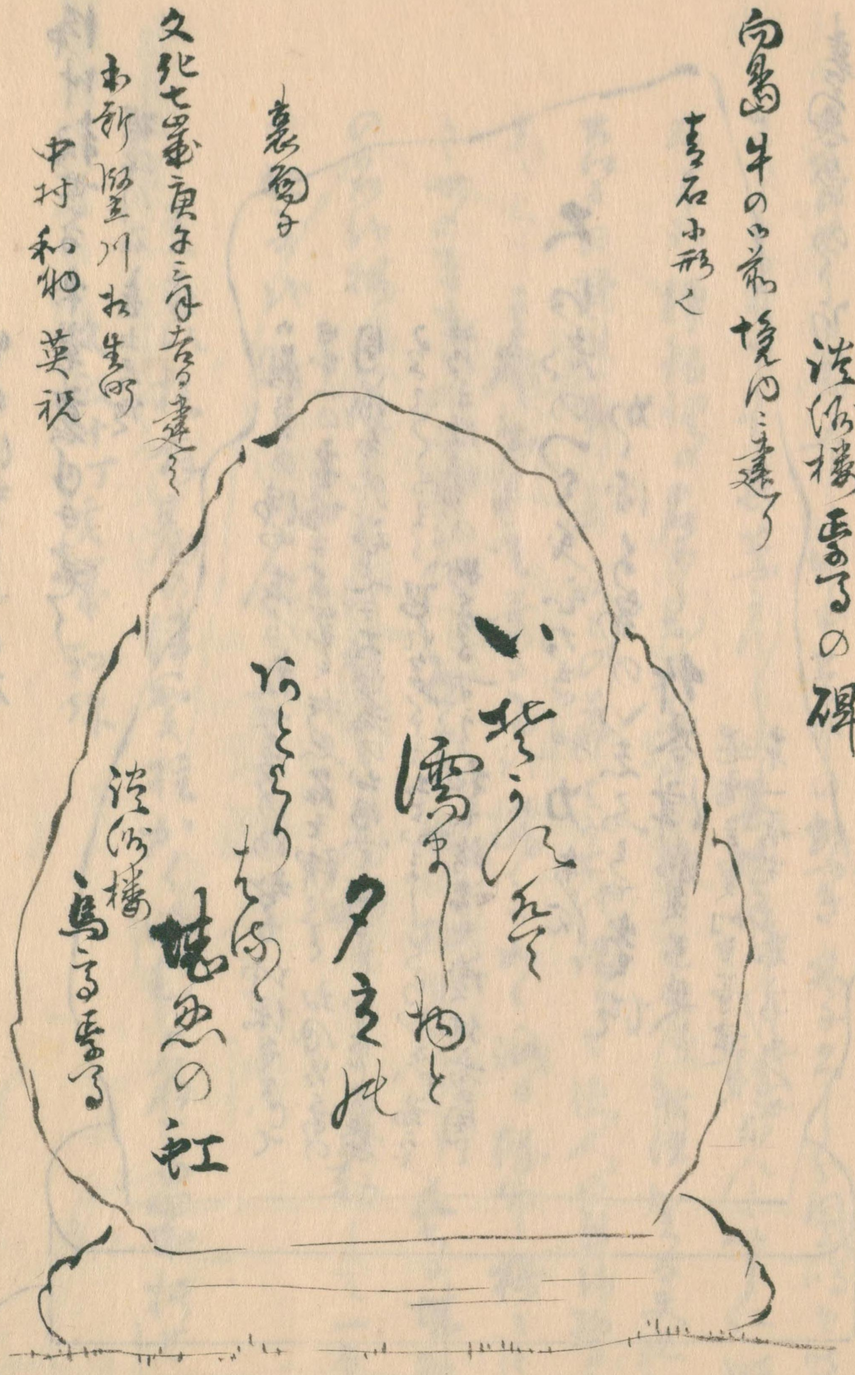
裏面ヲ
皆主保九年中
五年中間建ツ
施主 春高義



国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

立川雲石の碑

沼川湯宮境内子連ノ
根府川石ニ刻ス



石川様多摩
琴三様琴雄
柏ヤいる
亡妻文中
梅園様ヨ
三回忌ニ
立川雲石

執事
立川松栄
立川鏡石

七十翁 雲石
松柯

立川雲石の碑

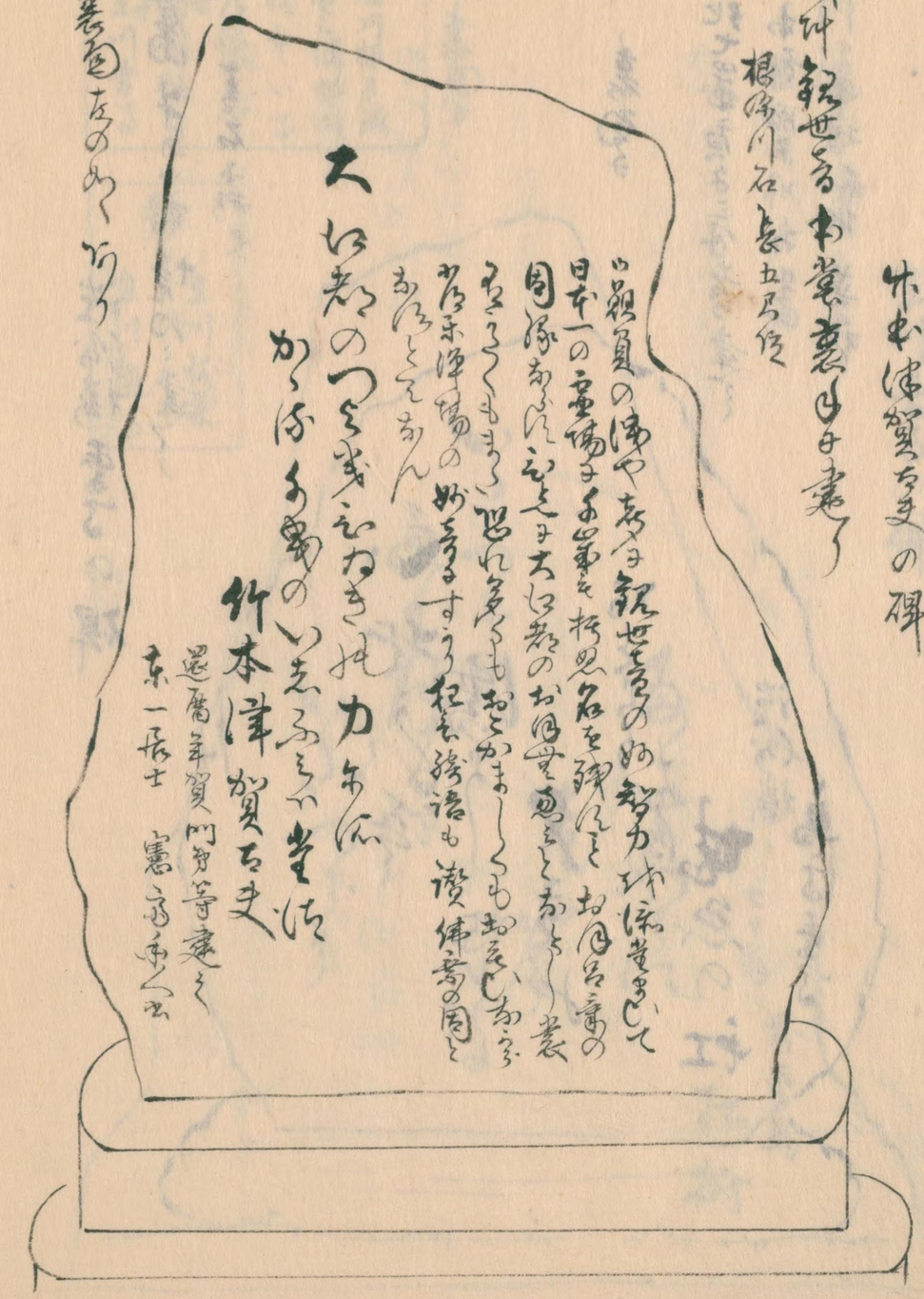
向島牛の御境内ニ建ル

書石小形之

文化七庚午三月吉日建之
東都 立川志遊
中村和助 英祝

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用



竹本津賀吉の碑

竹本津賀吉翁は紀州名草郡の人にして幼名を磯吉と称し大和路の一の宿場まで出でて大和名産の柿を商ひ居たるも恐れ多くも御大葬の砌り柿を献上せんとて東京に出でたるが其の柿の売れざりしかば其の儘東京に留まり義太夫語りとなりぬ

大和路のつき出ぬ先ぞ見ふるさ

かく詠じたる翁の心意気は実に感ずべきものあり

竹本津賀吉之墓

遥か遠く年賀門弟等建之

東京一番士　憲吉再建之

文化のたしなみありて竹本豊竹の語り出でしころより興行を少なからず助けたりとて其根岸に葬られしが後ち改葬して浄福寺の墓地に移したりと聞く

其の墓の撰文を書かんがために芝神明前なる豊竹呂昇女史を訪ひて語りて得たる津賀吉の身の上話を聞くに誠に涙ぐましき物語なりき

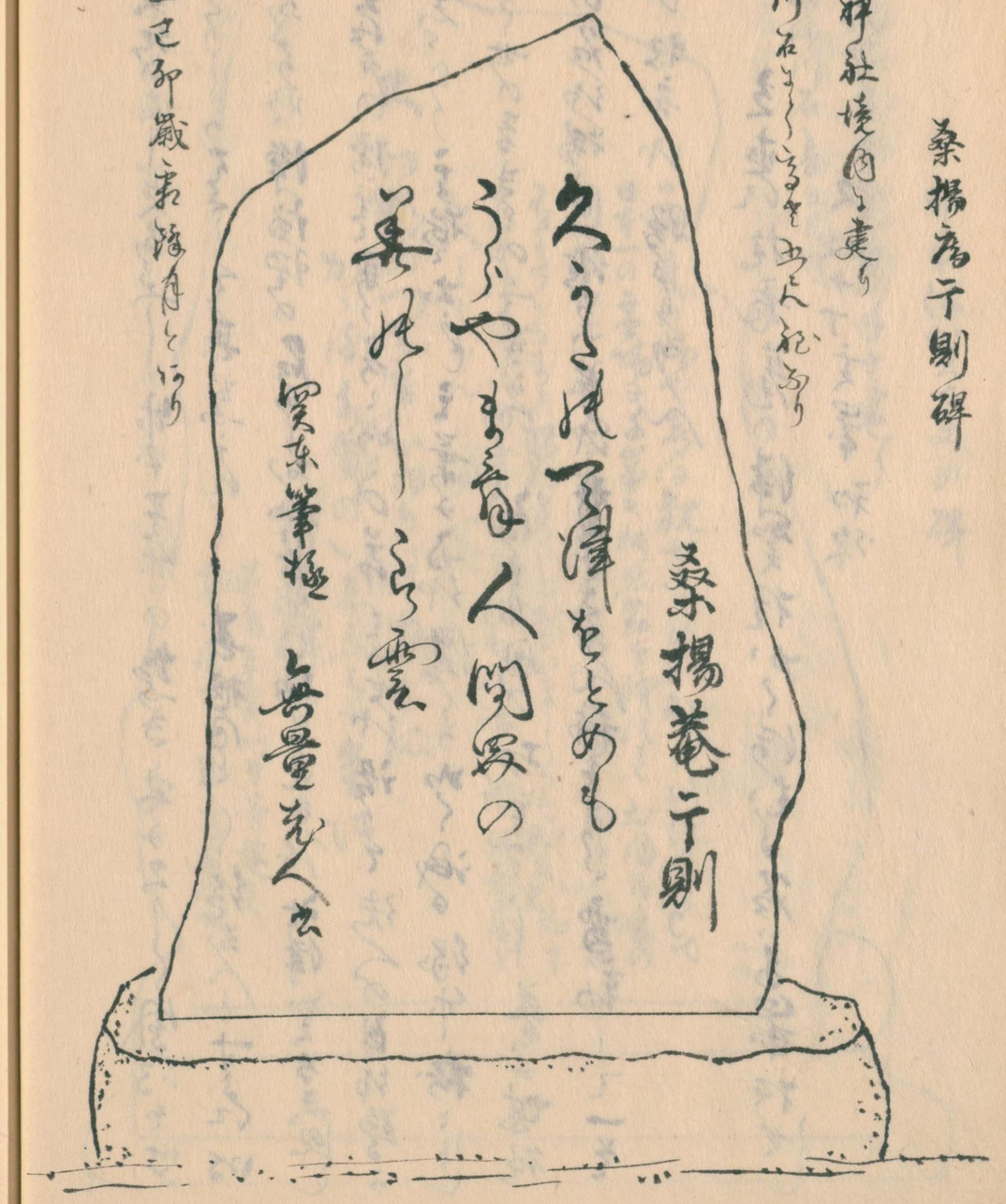
津賀吉は幼名を磯吉と称し大和路の一の宿場まで出でて大和名産の柿を商ひ居たるも恐れ多くも御大葬の砌り柿を献上せんとて東京に出でたるが其の柿の売れざりしかば其の儘東京に留まり義太夫語りとなりぬ

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

桑揚庵千則碑

向島牛鉄神社境内ニ建ツ

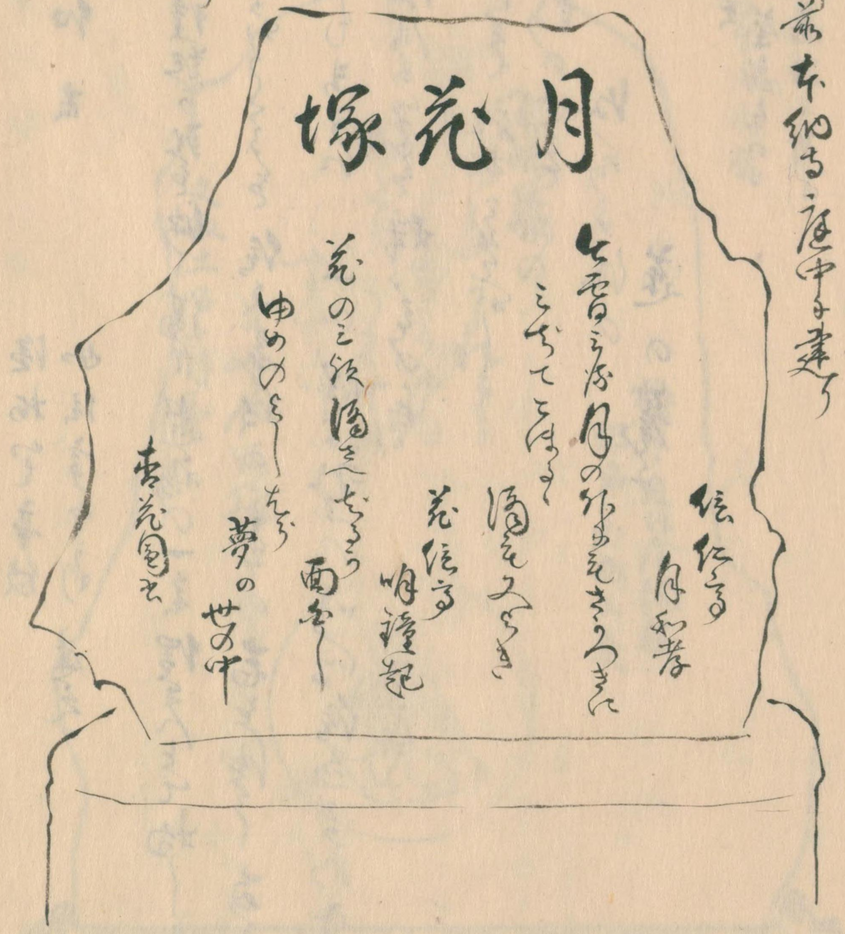
根岸御行石ニ〜〜ニ生ル松アリ



月花塚

雑司ヶ谷鬼子母神前木納屋庭中ニ建ツ

根岸御行石ニ生ル



裏面ニ彫ル

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用

泡栢なき事を
如信宇治
給仕する人種種の死を悔て傷て超福の一を得んとて栂ノ尾
きれど必ずまのあたりを信文幸枝の
経営の折ももちろん一の碑を折ふし時信あるを
その跡の痛ましき様を探りその年
酒をくみくみかはしくみかはし
栂の世をぬけ出る法の
道の暮

文化七庚
午孟冬の日

猫塚の碑

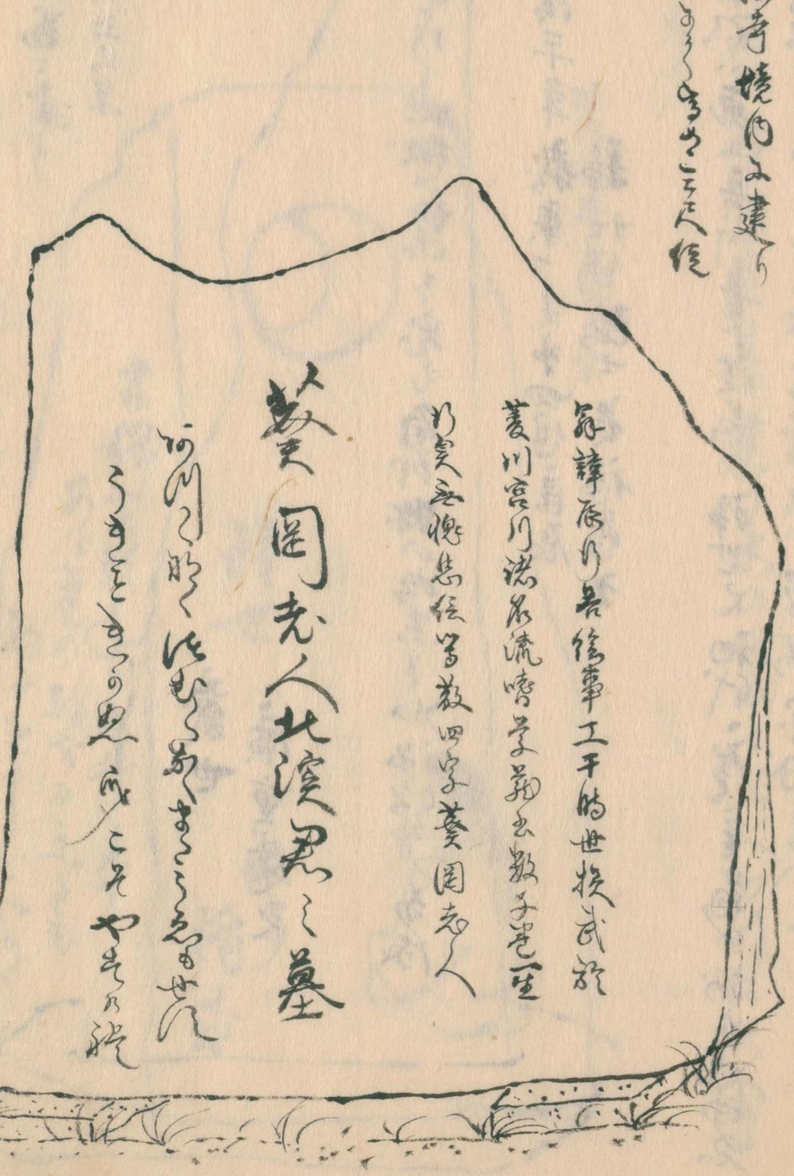
淀川長岡村雲龍院墓地に建り
根村川名村にて当て八住

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

中村梅子の碑

柳川浄心寺境内より遷り

根岸川石ふみ狂歌四天王の一



其の碑も裏面も表面も同人の筆蹟を満足す

魚石北渓の碑

多賀谷村立信寺境内より遷り

根岸川石ふみ狂歌四天王の一

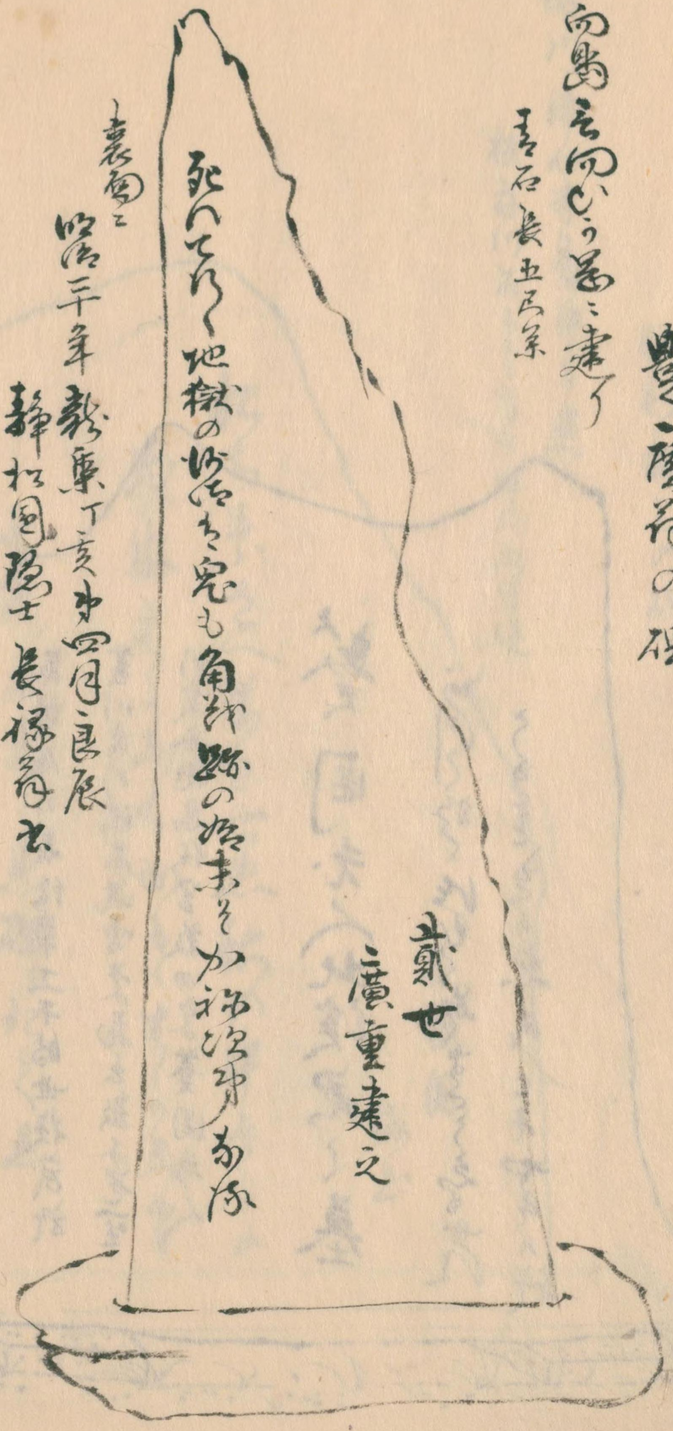
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

豊後屋義の碑

向島百花園の園に建つ

高石長五呂筆



表面に
嘉永三年歳庚戌四月良辰
静松園陽士 長梁義書

社碑の弥い重立斎川豊屋義の辞世と和代豊重筆の狂歌を併せ
二世の屋重ふたゝび筆をとりて古い地の碑を建つ
ものなり

根岸の石長五呂筆

辞世 橋本

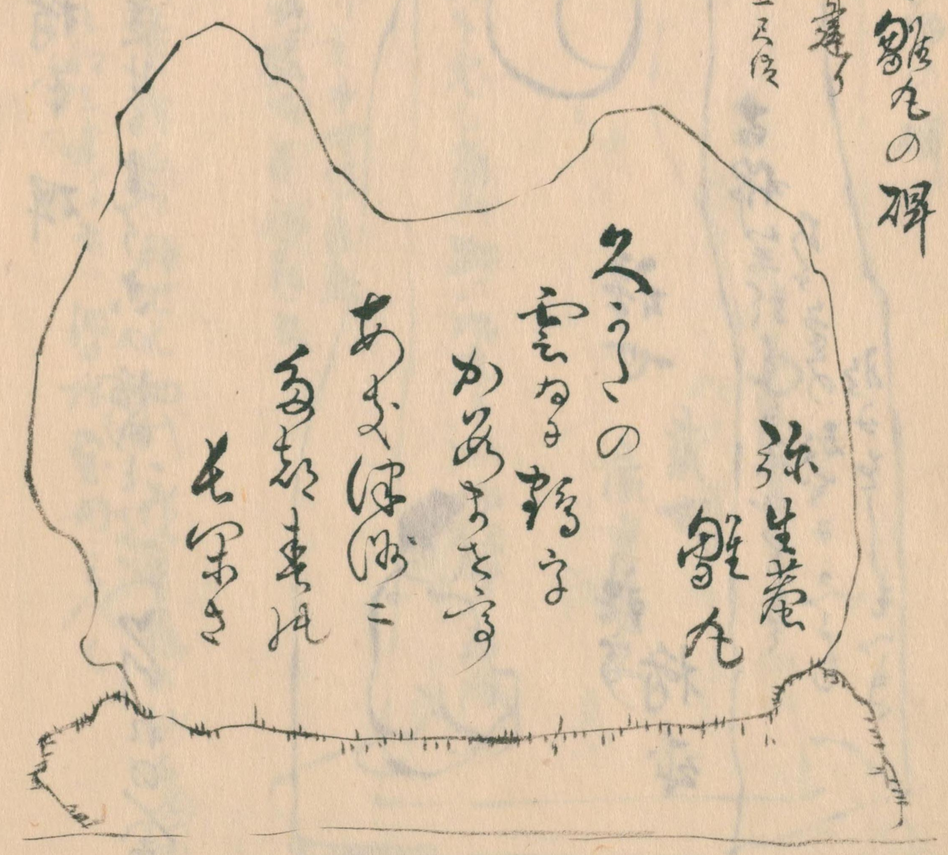
亮井戸天神社内池辺の芝生に建つ古い
やはらぐるふみ

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

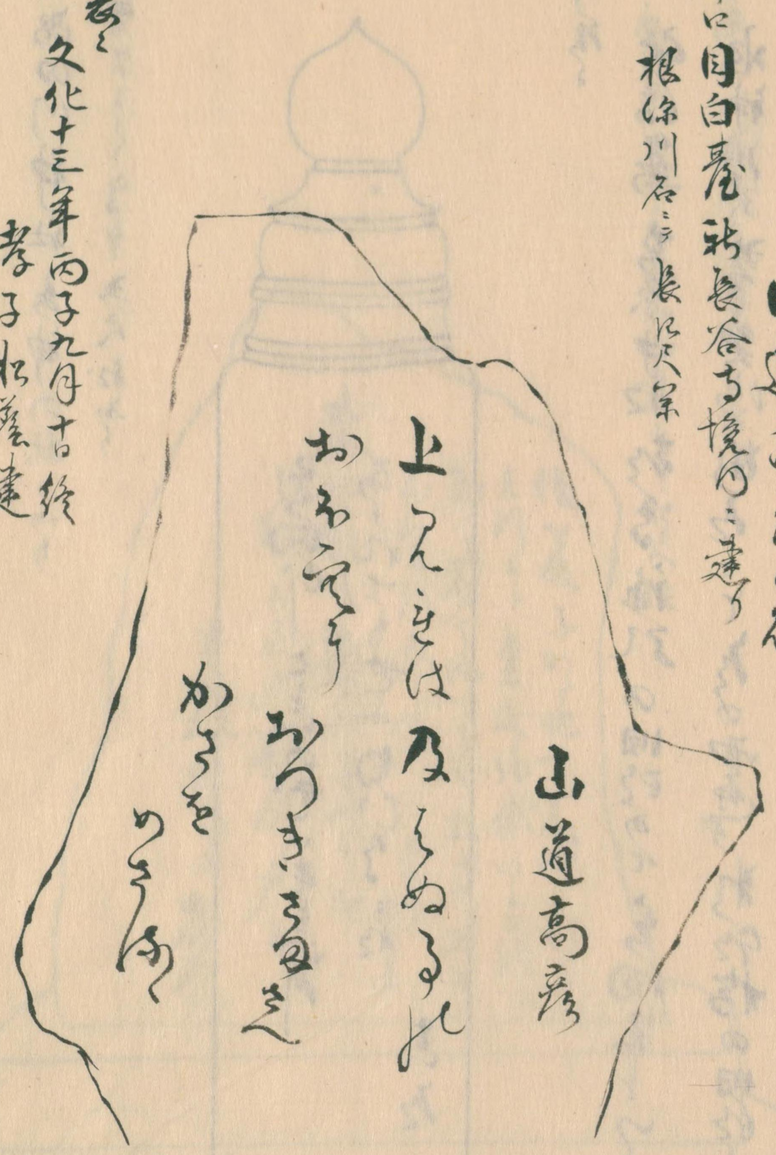
弥生庵磐九の碑

芝公園地先線を境内の墓より
根岸川石長二尺巾五尺位



嘉永
天保七丙申年
二月二日
三世 弥生庵磐九
辞世歌名ゟ

久かたの
雲なる鶴を
かぞへつゝ
あまた連れ
多年来れ
ども



山道高彦の碑

墓ハ日白髪町長谷寺境内ニ建ツ
根岸川石ニテ長二尺余

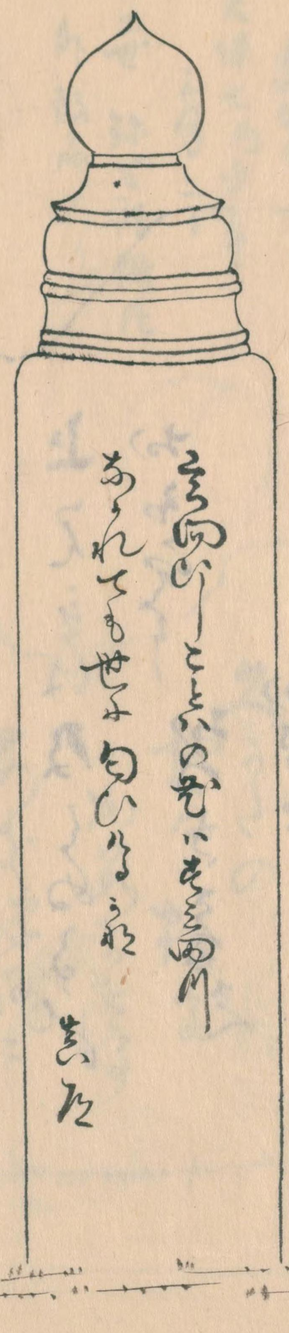
止ゝとは
おもへども
かぎりを
ものゝ

嘉永
文化十三年丙子九月十日終
孝子松蔭建

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

生石の碑

向陽湯田川神社 水神の社ふうり
望石ふるく ふみ出ぬ 狂人 行



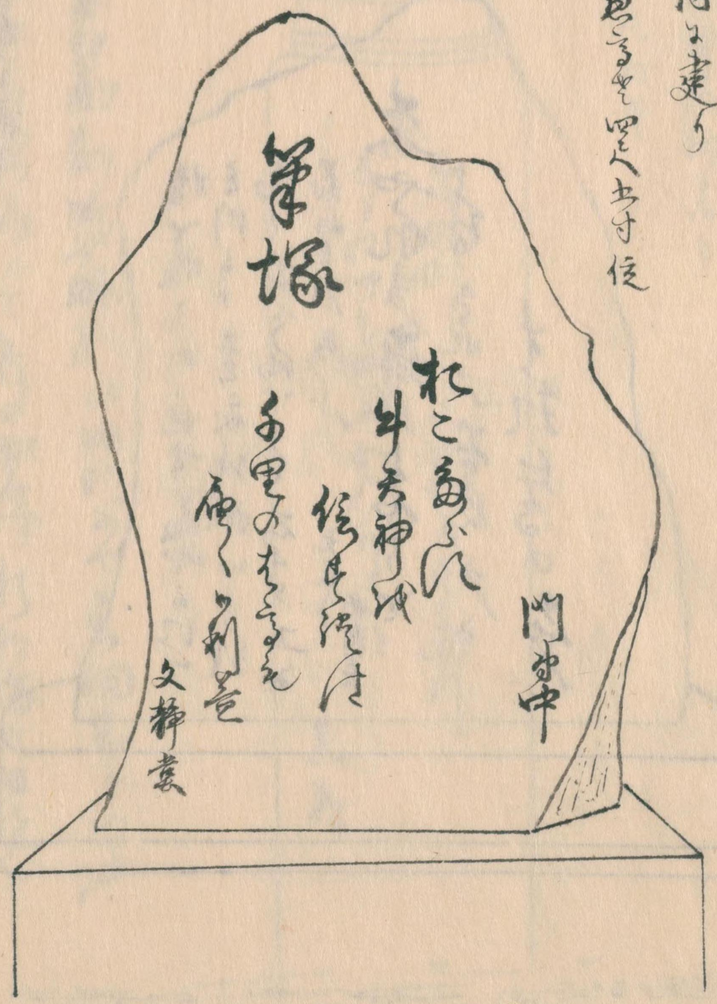
碑陰ふ

北原為 吉永中野 新谷 深瀬の諸氏
水神ふい 苔ふみ狂歌 樹石 こと ふの雪 ふ 彩色 桜の 四季
とふり

玄朱ふ 酒肉墓碑

王子滝の川奈枝矢 ふ 車ふ 建ふり
根村川 石ふるく 書石ふ 出ぬふ 狂人 行

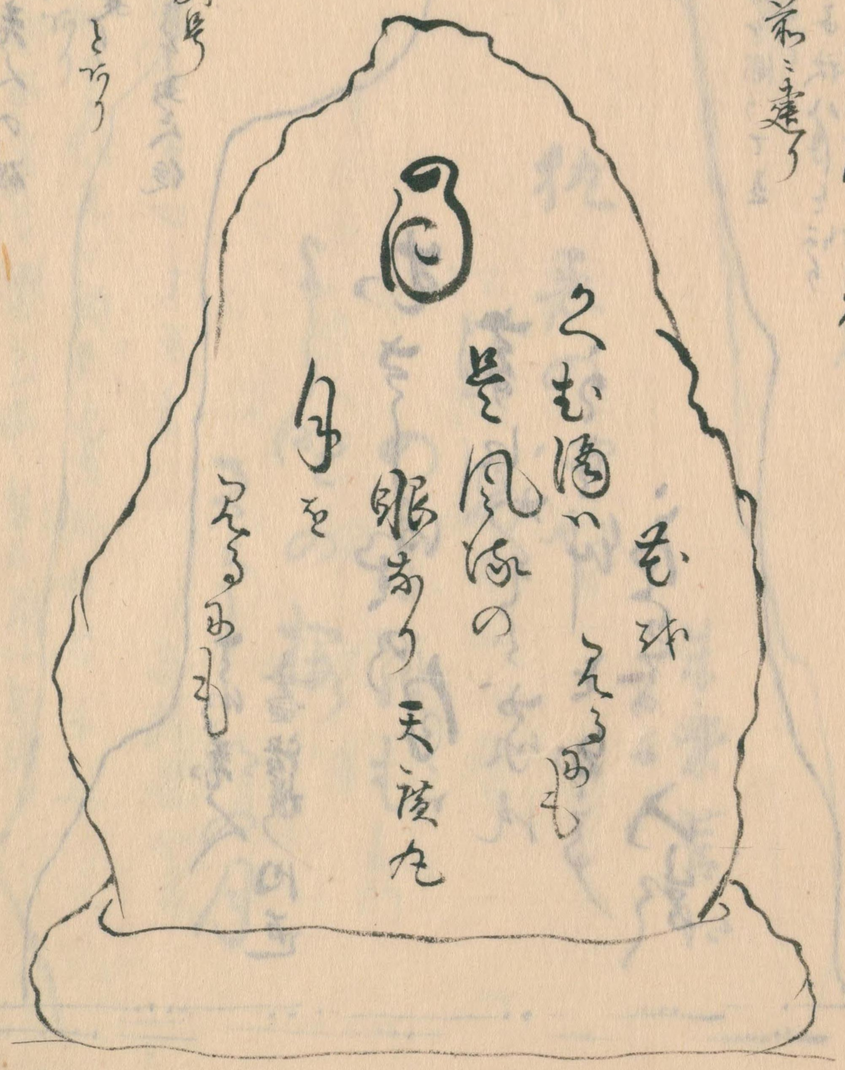
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用



文静堂の碑

碓川牛久神の境内に建つ

裏面



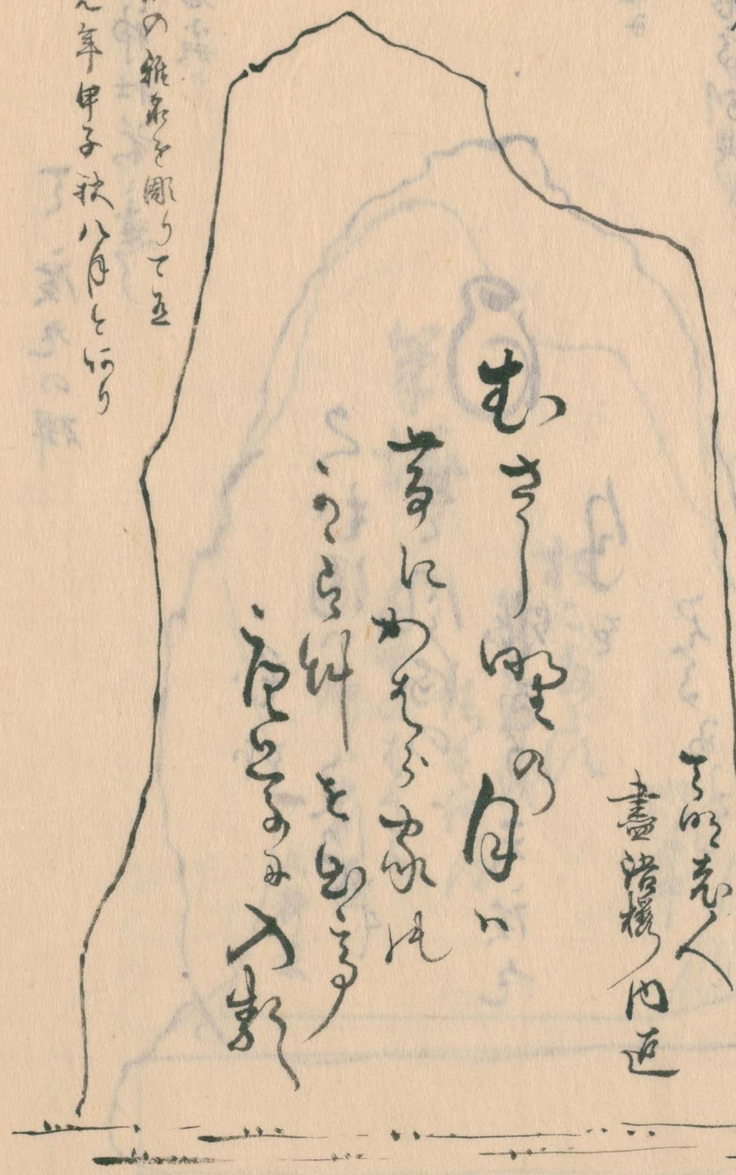
向島白髭神社前に建つ

高さ石小形之

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用

向嶋三圍橋の西より東
根岸川石ふみ狂歌の人々



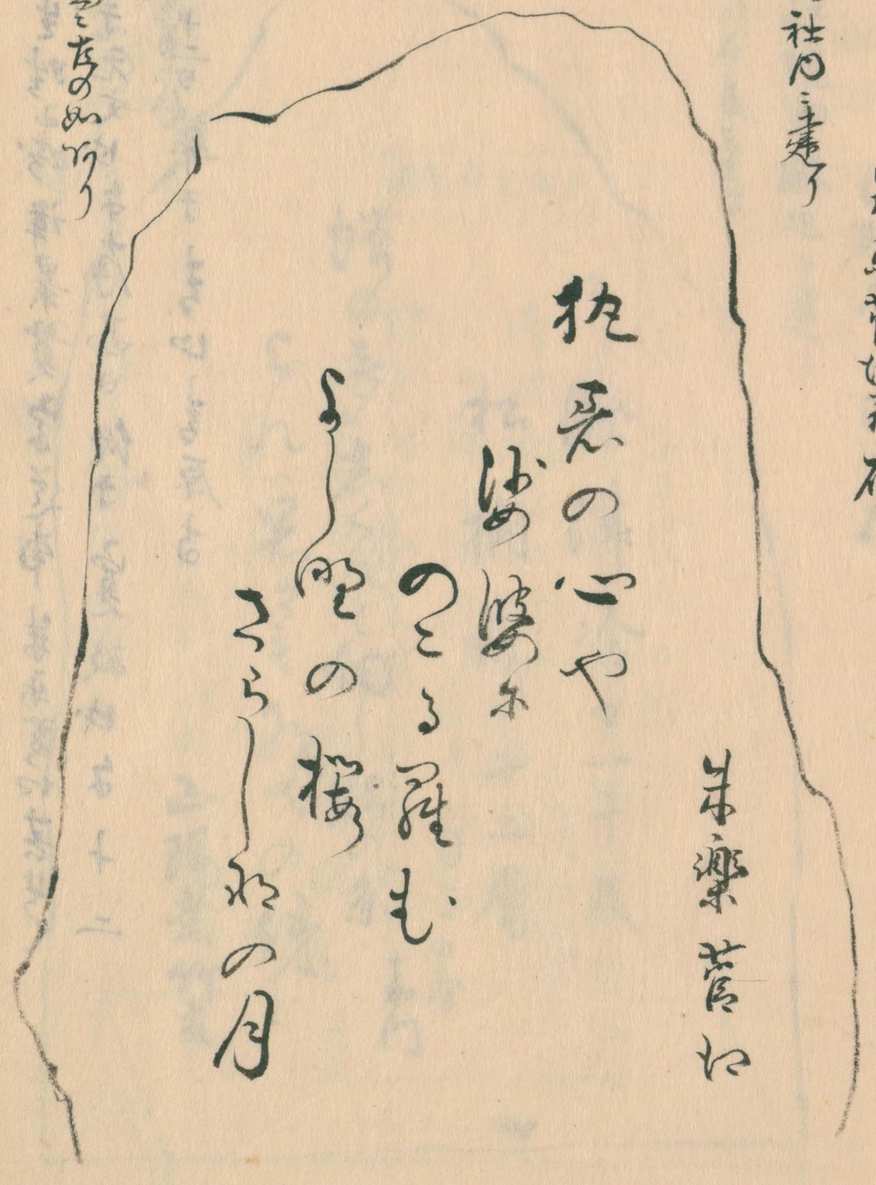
碑陰

門人數名の姓名を擧ていふ
文政元年戊寅秋八月とあり

むさしのの月
書樓橋の西辺

向嶋三圍社内に建

朱樂菅公碑



朱樂菅公

牧冬の
心や
のこる
の桜
れの月

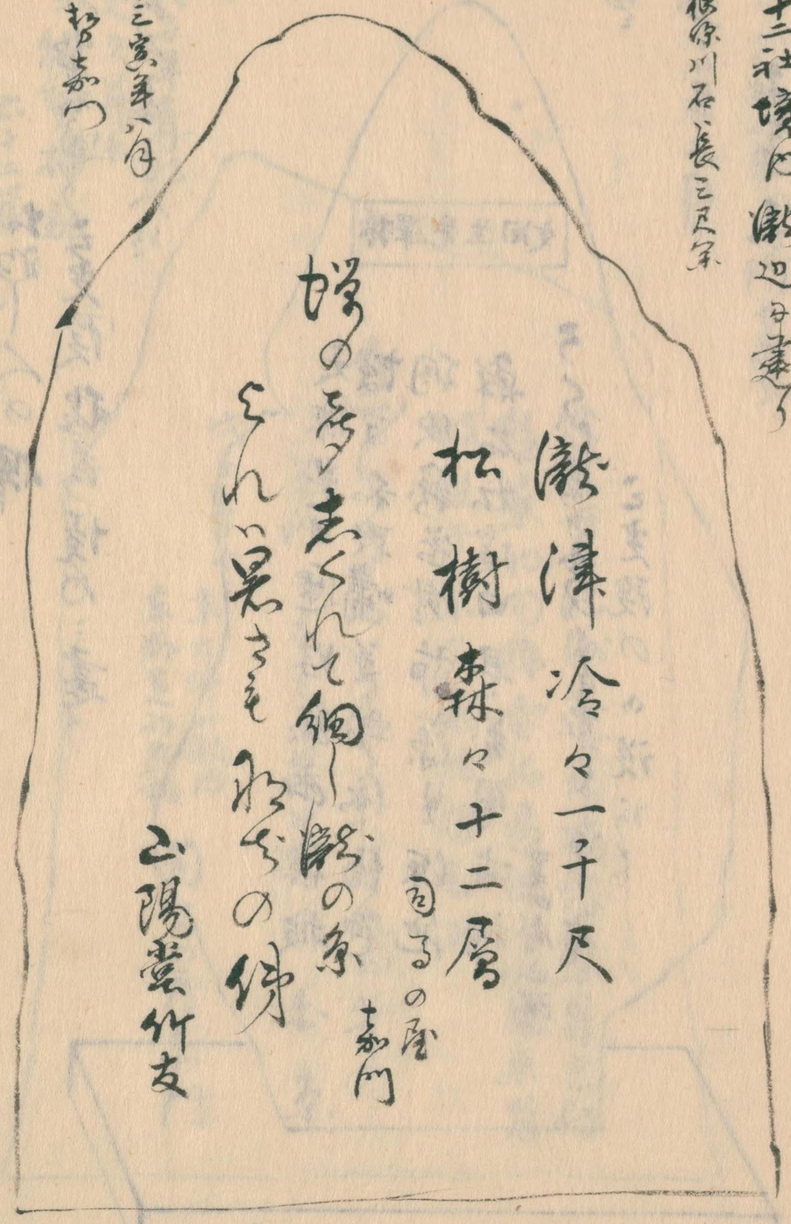
裏面に左の如し

先生姓山崎諱景賢字述甫第乗如其号
生于元文戊午春五月廿四日歿于寛政甲子十二
月十二日葬于青山青原寺

山陽堂山陽の碑

角筈十二社境内淀辺の景

横山川石長三尺余

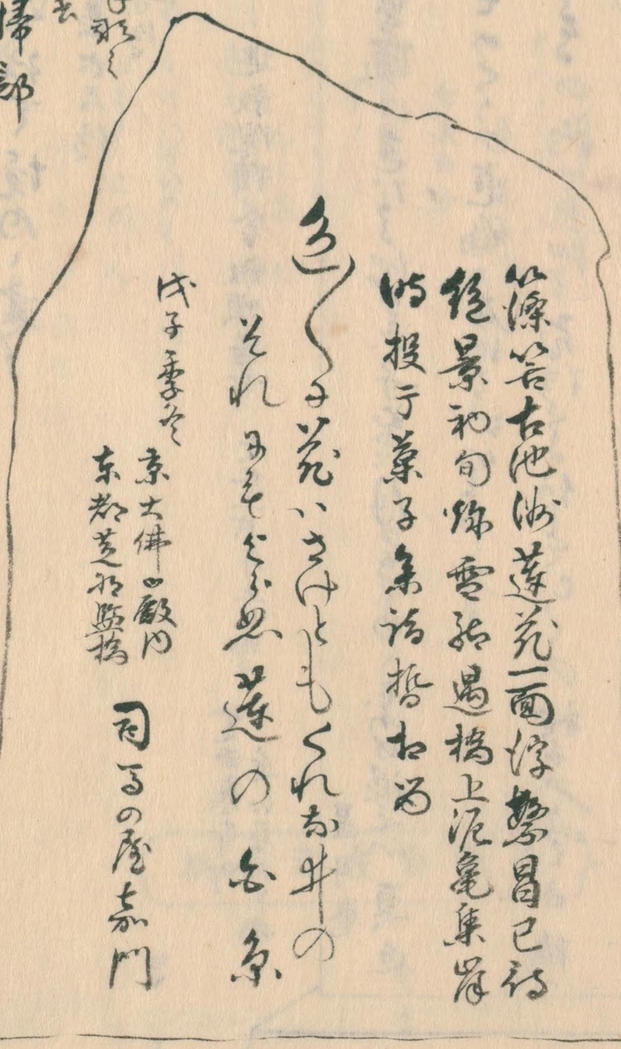


国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

お邪じ人の碑

四谷弁天社内入口に建つ

根岸川石工長三氏作



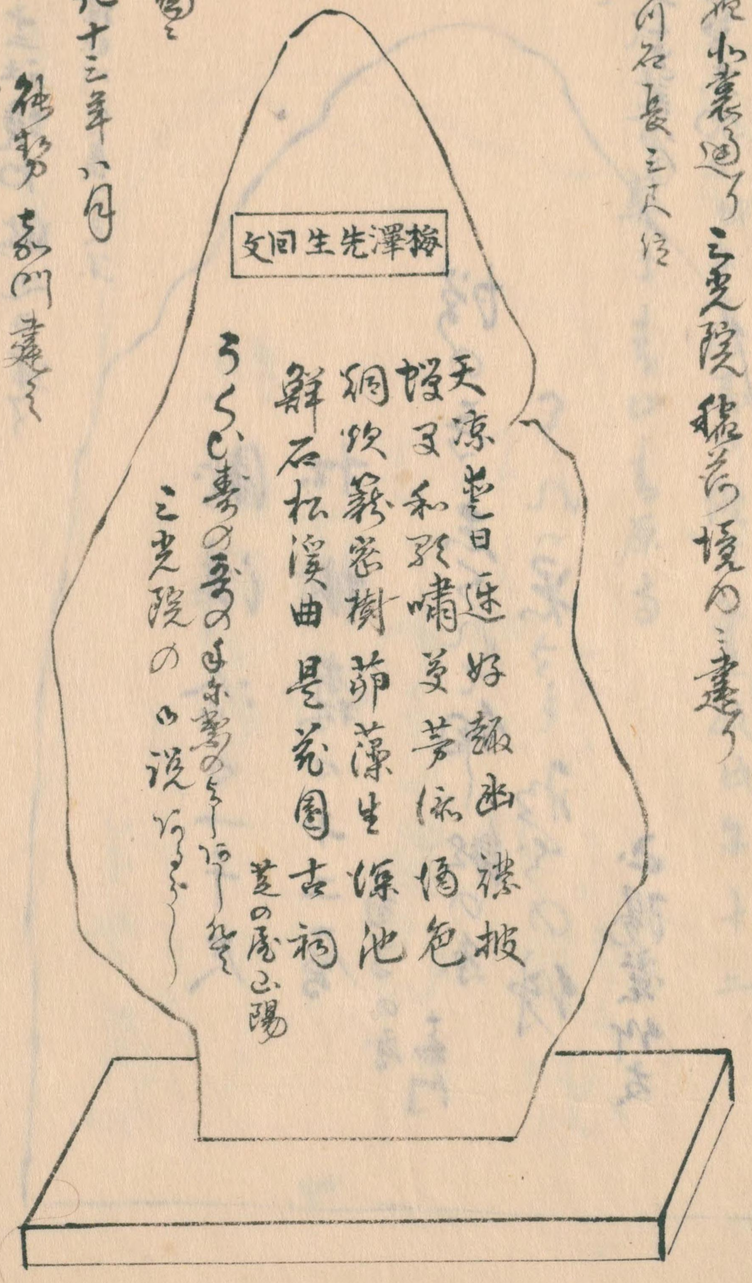
篠苔古池波蓮花一面浮勢昌已行
経景和句俳雪跡過橋上泥亀集岸
的投于菓子集話指お苔

ゑ〳〵ゑ花いさみともくれお井の
それもそなふ無蓮の名条

伐子春女 京大佛門
東都芝神明前

司るの屋赤門

嘉永
文政十三年寅歳
牛込久兵衛
彫工 柱野掃部
六十二翁



天涼皆日速好飯幽襟披
掃又和歌嘯芙蓉依偏色
桐吹籌密樹節藻生深池
解石松渓曲是花園古祠
芝の屋公陽

うらゝ春の日永書のよう〳〵筆
三史院の一説なるべし

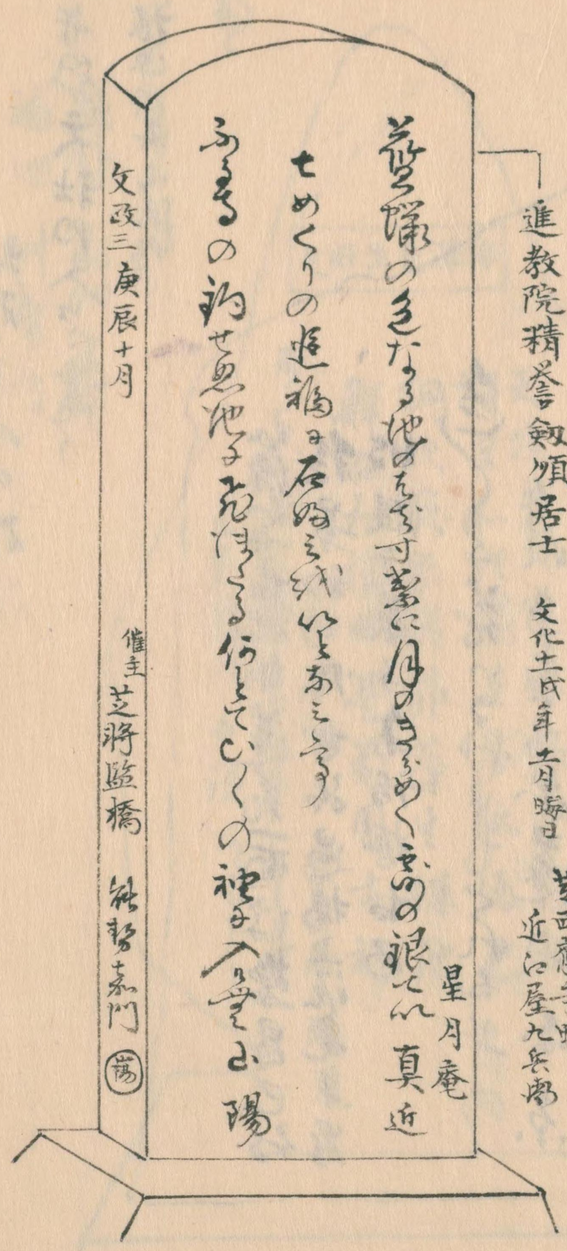
嘉永
文化十三年八月
柱野掃部 高川義彫
補池 仲賀写

お邪じ人の碑

四谷弁天社内入口に建つ

根岸川石工長三氏作

お形ち人碑



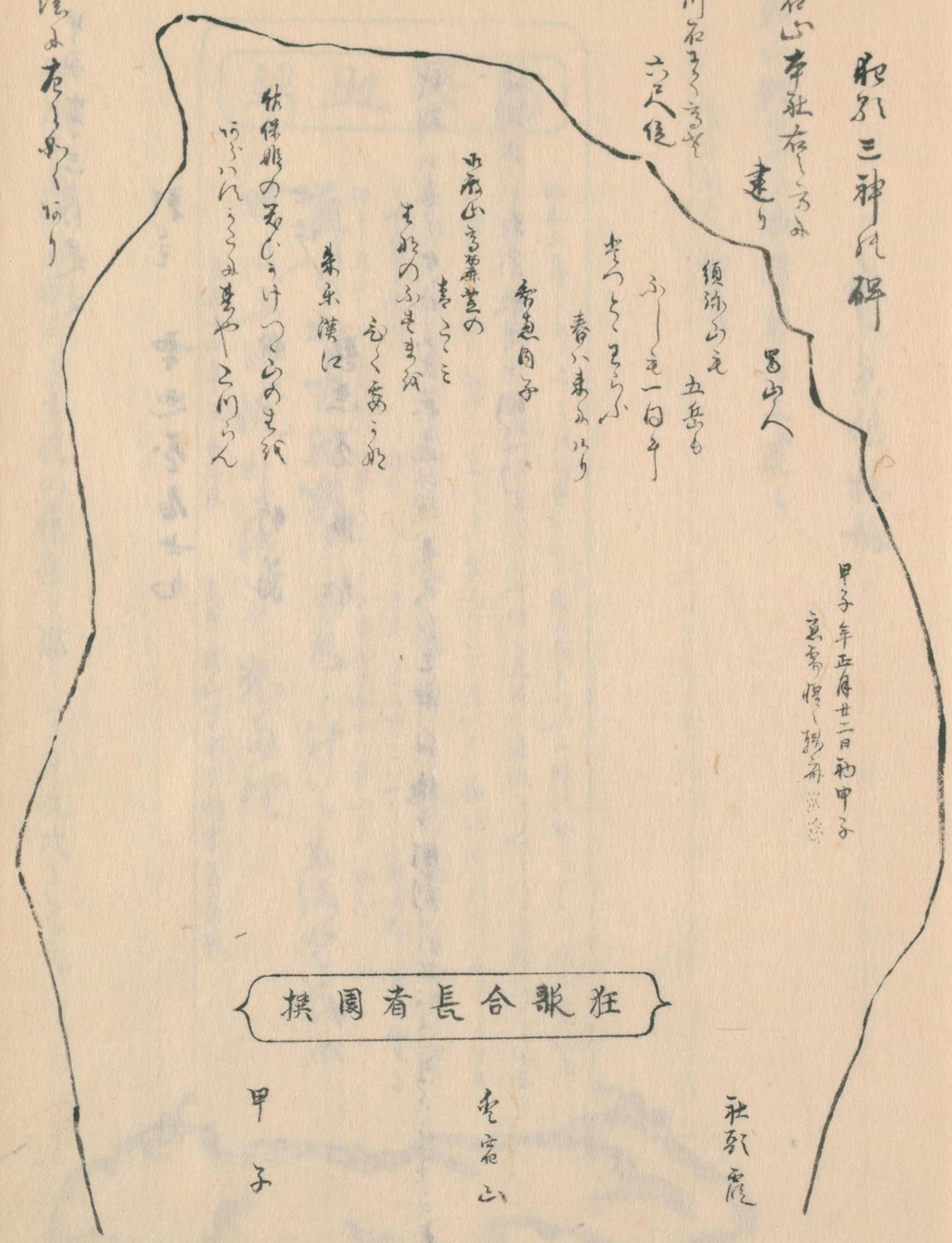
目黒岩屋無銭で境内に乗る

堕石ニテ長七尺位
巾三尺弄位

進教院精誉叡順居士　文化十弐年十月晦日　芝西應寺町
近江屋九兵衛

警踏の多なる地のそら寸寒に月のきらめくその根なれ　星月庵
ためくりの足袋の石路うれしくもあるこころかな　真近
ふるさの釣せ魚地子免地なる行とてしくの神な↗受ふ陽

文政三庚辰十月　催主　芝將監橋　能勢素門



駒込三神社碑

芝愛宕山本社在しころみ
連り　四ツ人
根津川石ころ多き
六人位

須弥山元　五岳も
ふしを一日千
歩つとそらふ
春いまみより
秀起同子

西夜山高葉芝の
青ここと
生ひのふもも秋
元く安うあ
朱朱漢江

秋保船の多しけつらめも紙
はぶいれこころみ生やこ川らん

碑陰ハ左ノ如クナリ

荘號合長者園撰

甲子　愛宕山　秋穐履

甲子年正月廿二日和甲子
直参惣〻獅子舞出ル

文政甲子年三月建之

[illegible] 雲迺屋士九

世話人 傳字 竹翁
艷画 歌仙

此碑は嘉前生の半ば大足寿此碑三神の像を彫刻して
若園撰述教育を開くより

山東京伝 机塚

今朝心織笑まる朝寒さの違ひ

[illegible]

書巡礼

明和六年と云ふとき二月[illegible]歳九歳とつかふ
そを一巻にあつめ時報のごとまりしふ[illegible]
名をあらそふみやこうつし[illegible]
こもらをさゝんをつきつゝそゝい五十ゐ[illegible]
りふたゝびかゝるしるしもなし[illegible]
ゆうこゝろとしてそゝおいみ光しらべさまあるを[illegible]

耳も我古称あ[illegible]も久[illegible]汁て 光る
世よふ添机打[illegible]て

文化十四年丑春二月　　竜寿亭山岸常潤茶翁書並墓記

碑陰ゝ南畝翁撰新[illegible]京伝の碑銘を溝りうち又次まゝえゝろ

翁諱醒字酉星号醒斎又号山東庵稱傳藏以其所居近京橋一字京傳故其爲京傳最著磐瀬氏真先出自磐瀬朝臣人上近世資詮者仕大田道灌爲謀臣道灌亡世襲於勢州一志祖信篤考信明仕稟侯多病辞仕隱於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少好稗史小説數百著作□富戯文幻説謬悠無根能使人悲能使人喜坊間書賈進於剞劂者利市三倍於是兒童走卒莫不知京傳者晩悔少作無益於世改廟刻苦搜索奇秘著近世奇跡考及骨董集二百年來奇遠逸事考據精確可以補小史矣文化十三年丙子九月七日沒年五十六葬國豊山回向院茅百樹埋翁幼時寫字棄於淺草寺中榊本祠側遺以遺財建碑刻翁字記言以告後之讀其書而不知其人者爾

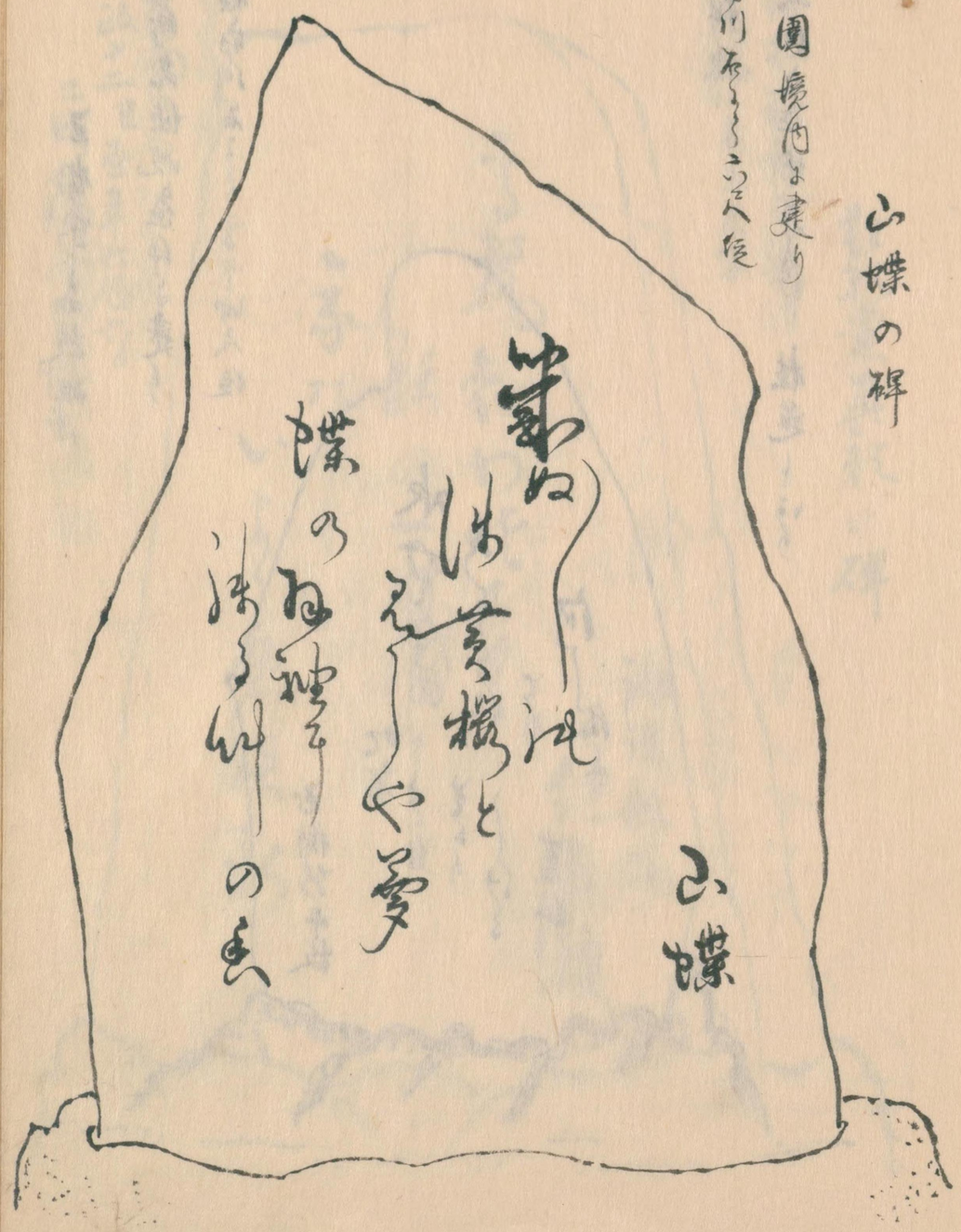
文化十四丁巳春二月　江戸南畝蜀撰

京山磐瀬百樹再書

山蝶の碑

向島三圍境内ニ建リ

根岸ノ川石ニテ二ツ之ヲ作ル



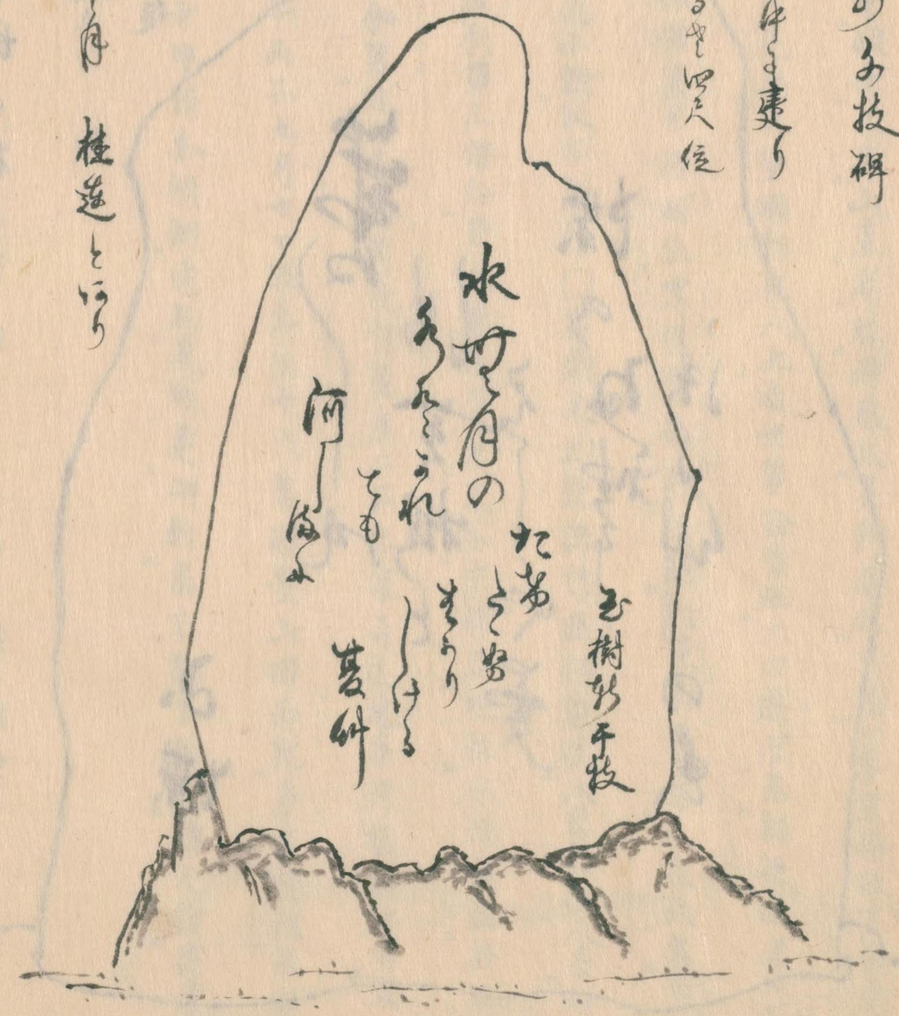
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用

玉樹翁の歌碑

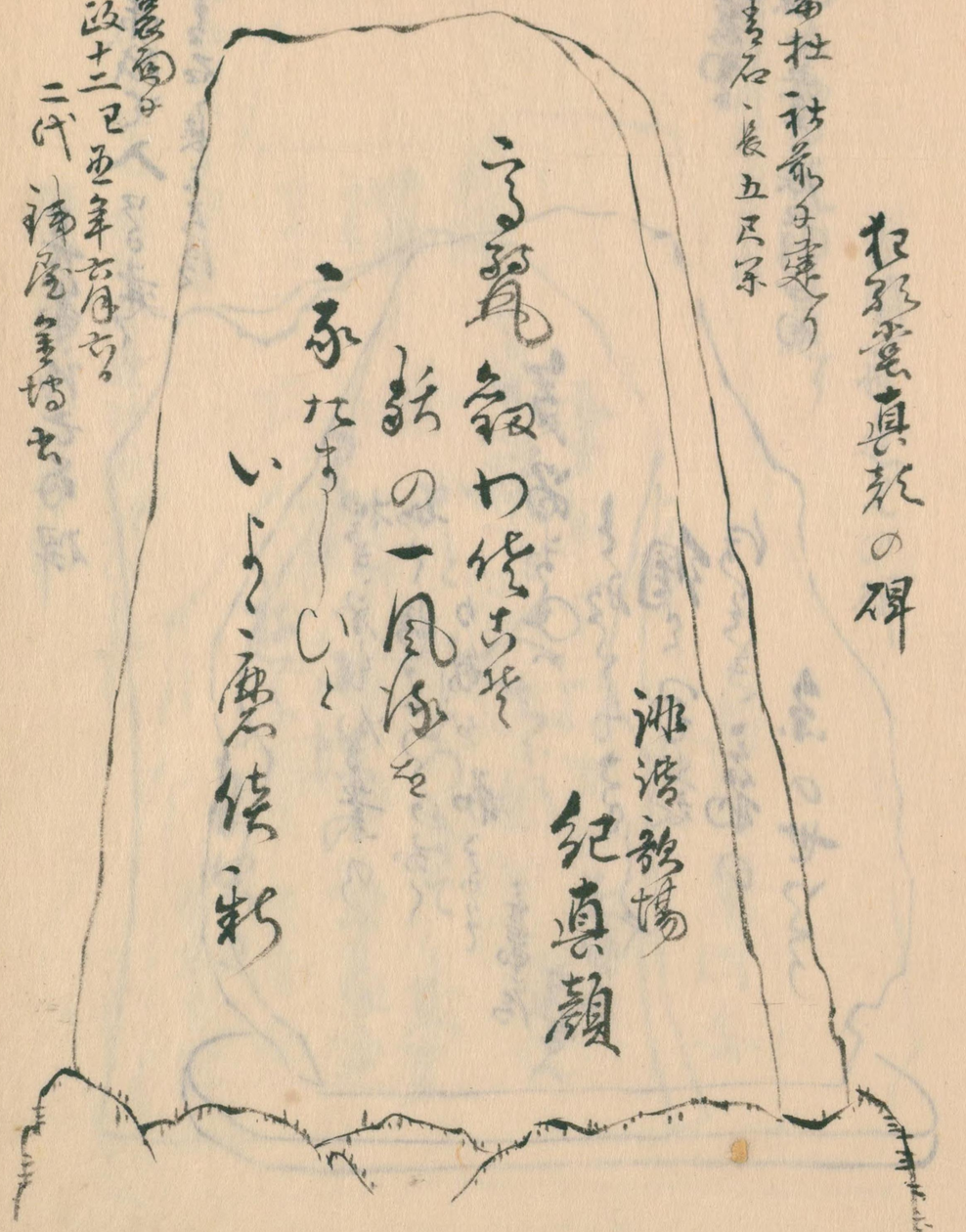
市谷柳町光徳院境内に建り

根岸川石まで二百四十八間



碑陰に

文化九壬申年春　植遍と云り

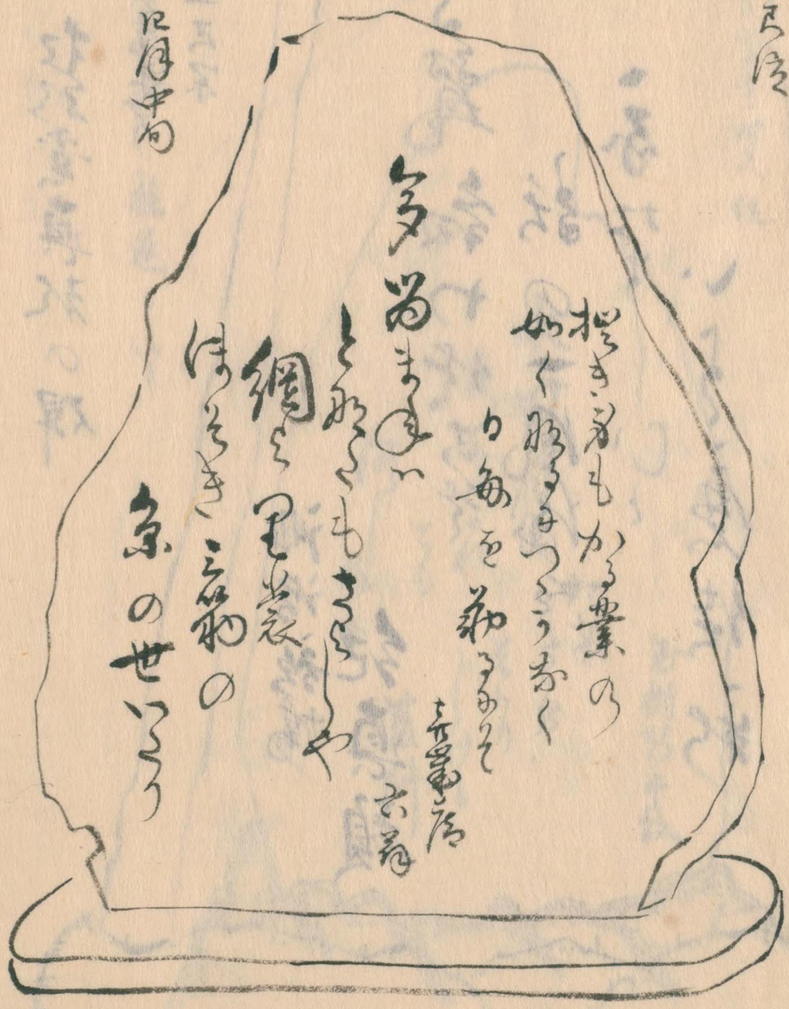


壱番杜　杜翁の建り

高石、長五尺余

杜翁雲真翁の碑

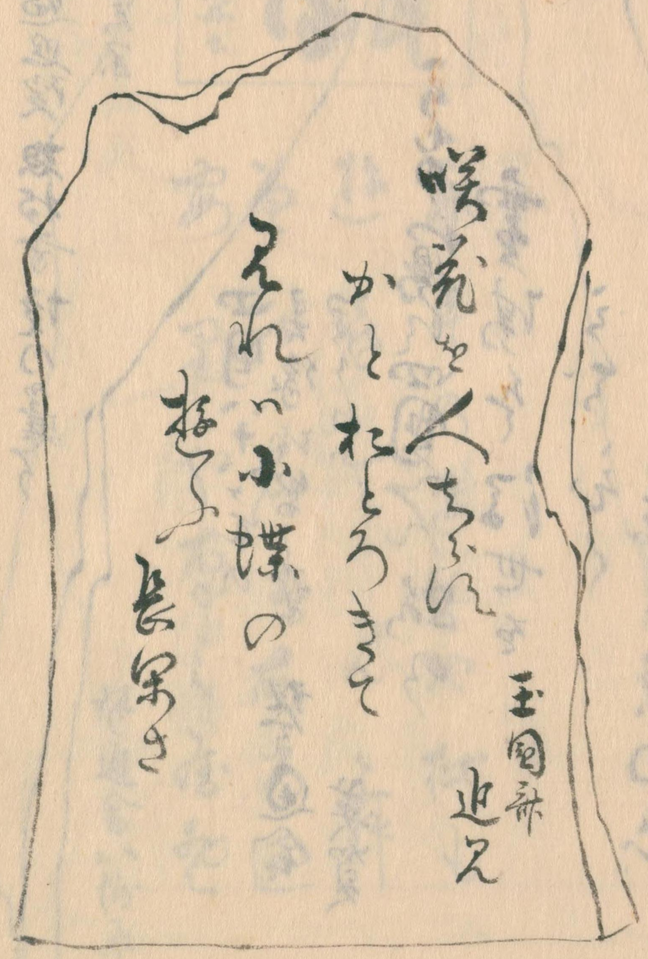
嘉永
文政十三庚寅年春
二代神尾春央書



玉園
文保十五年辰正月中旬

玉園神垣之碑

向島本所ある境内ある建
根岸の石工長谷

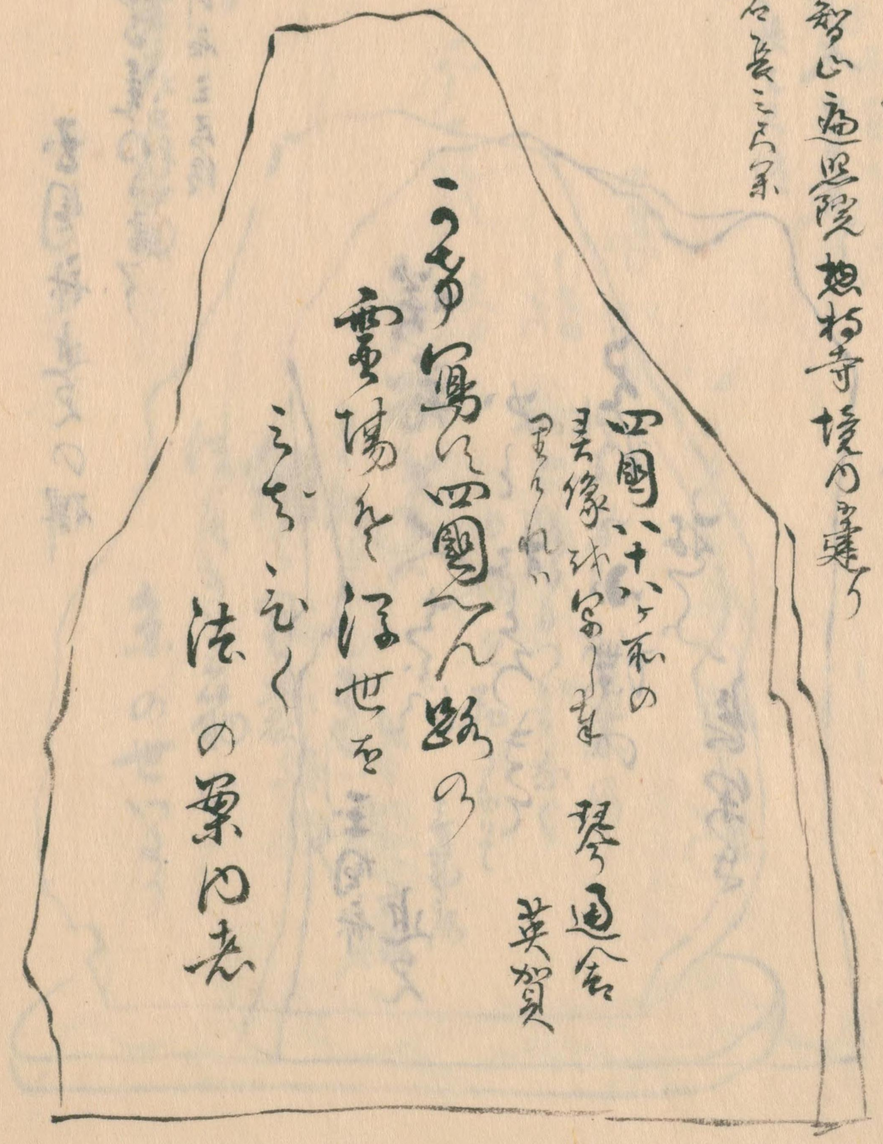


国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

琴通舎英賀の碑

西秋井村立智心通院想村寺境内墓地

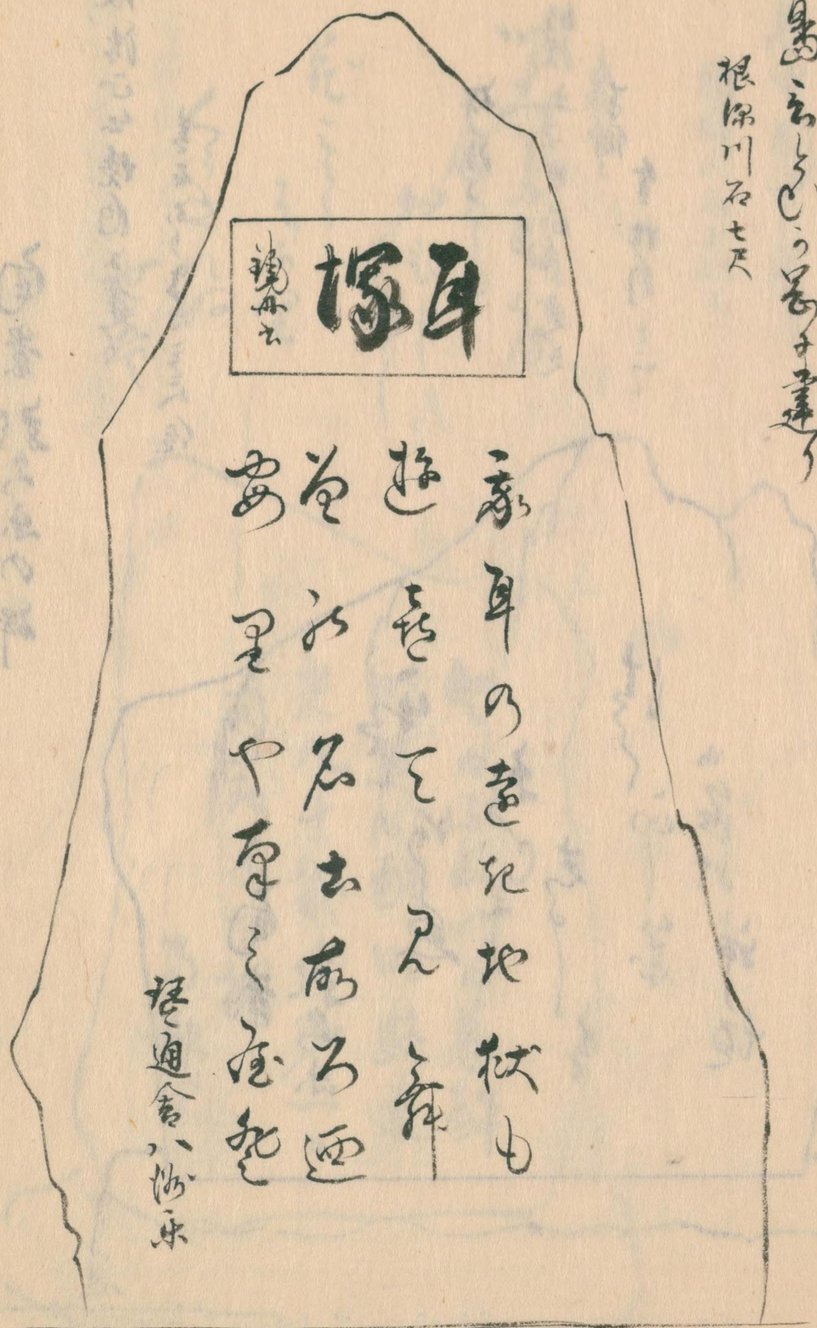
根保川石長二尺余



琴通舎康永の碑

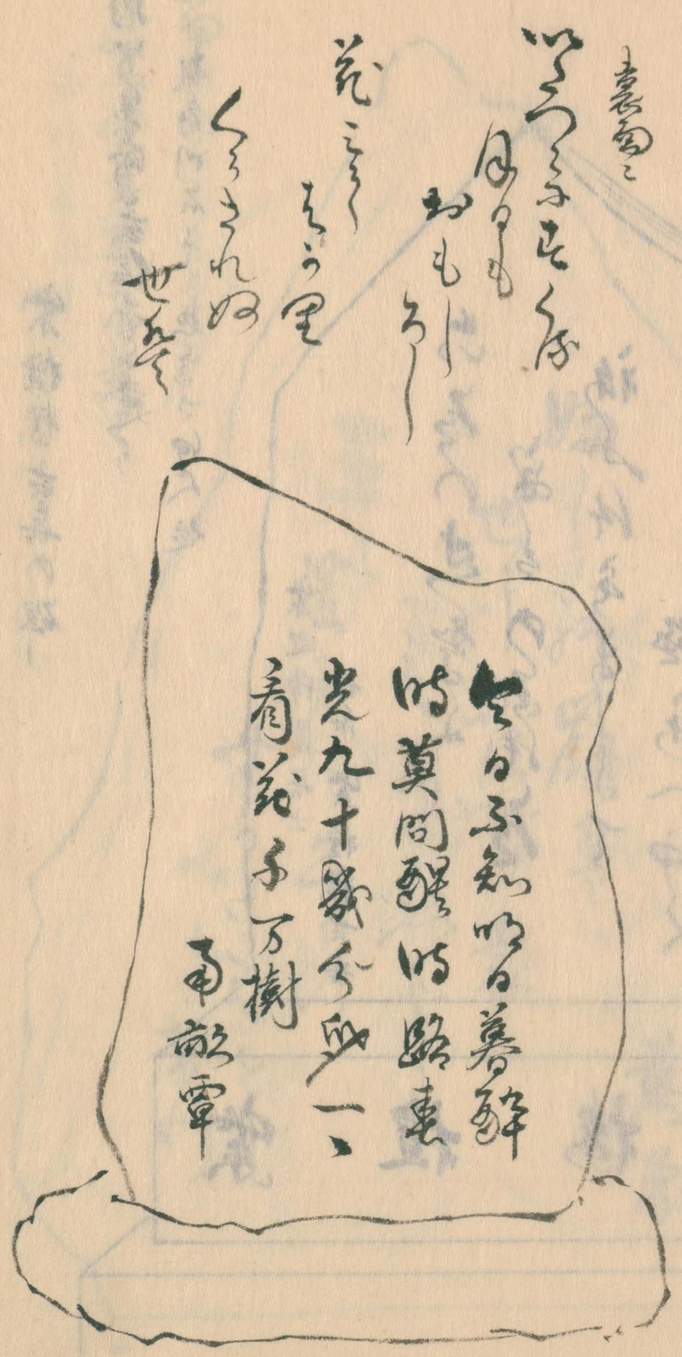
向島言問の芽生達

根保川石七尺



国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

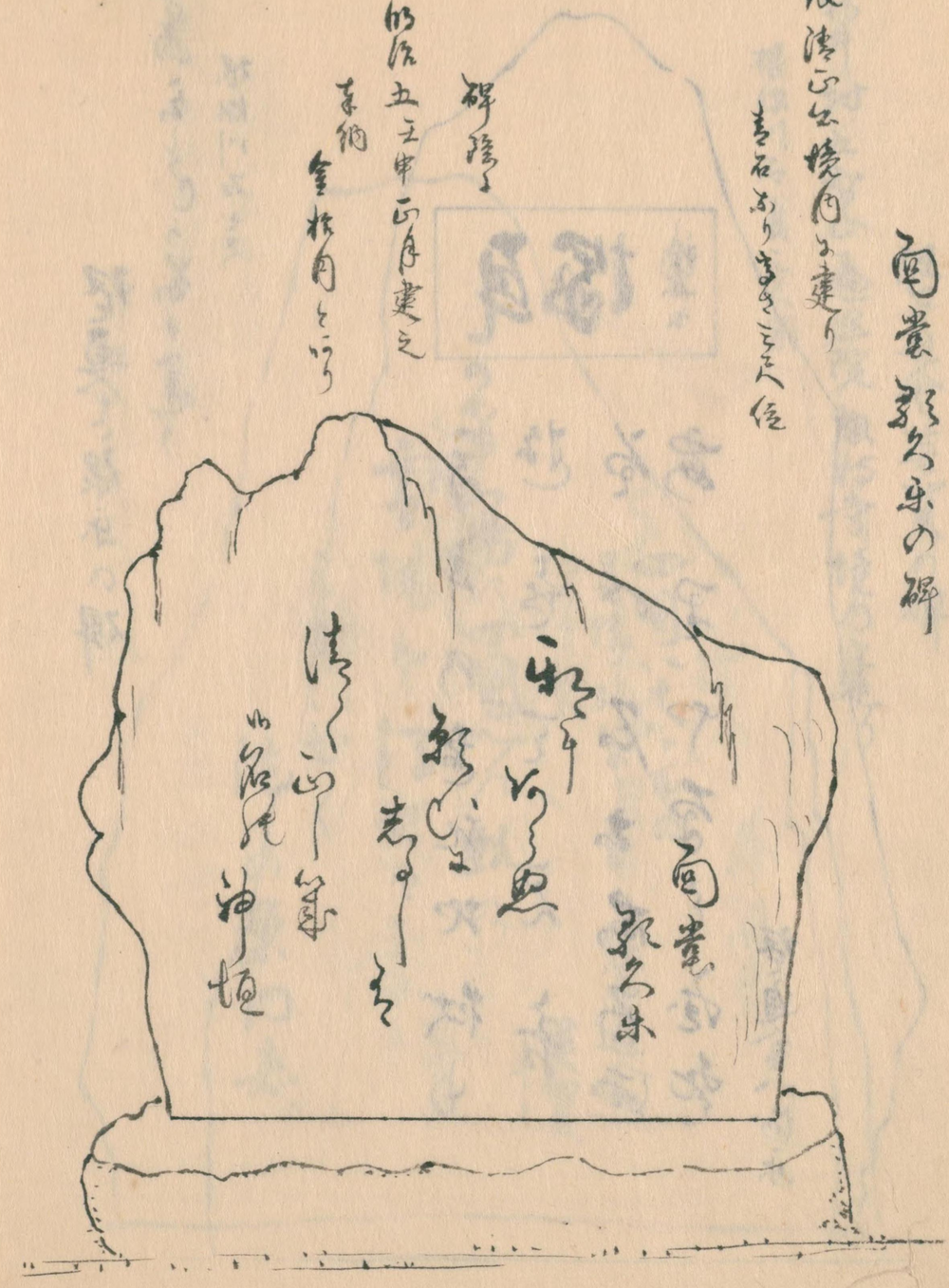
ガラス使用



蜀山翁の碑

日暮里周中之建之

根岸の石小形之



碑陰

明治五壬申四月建之

幸田 金松 両氏

白浪清正伝焼角之建之

青石ありまきこと人伝

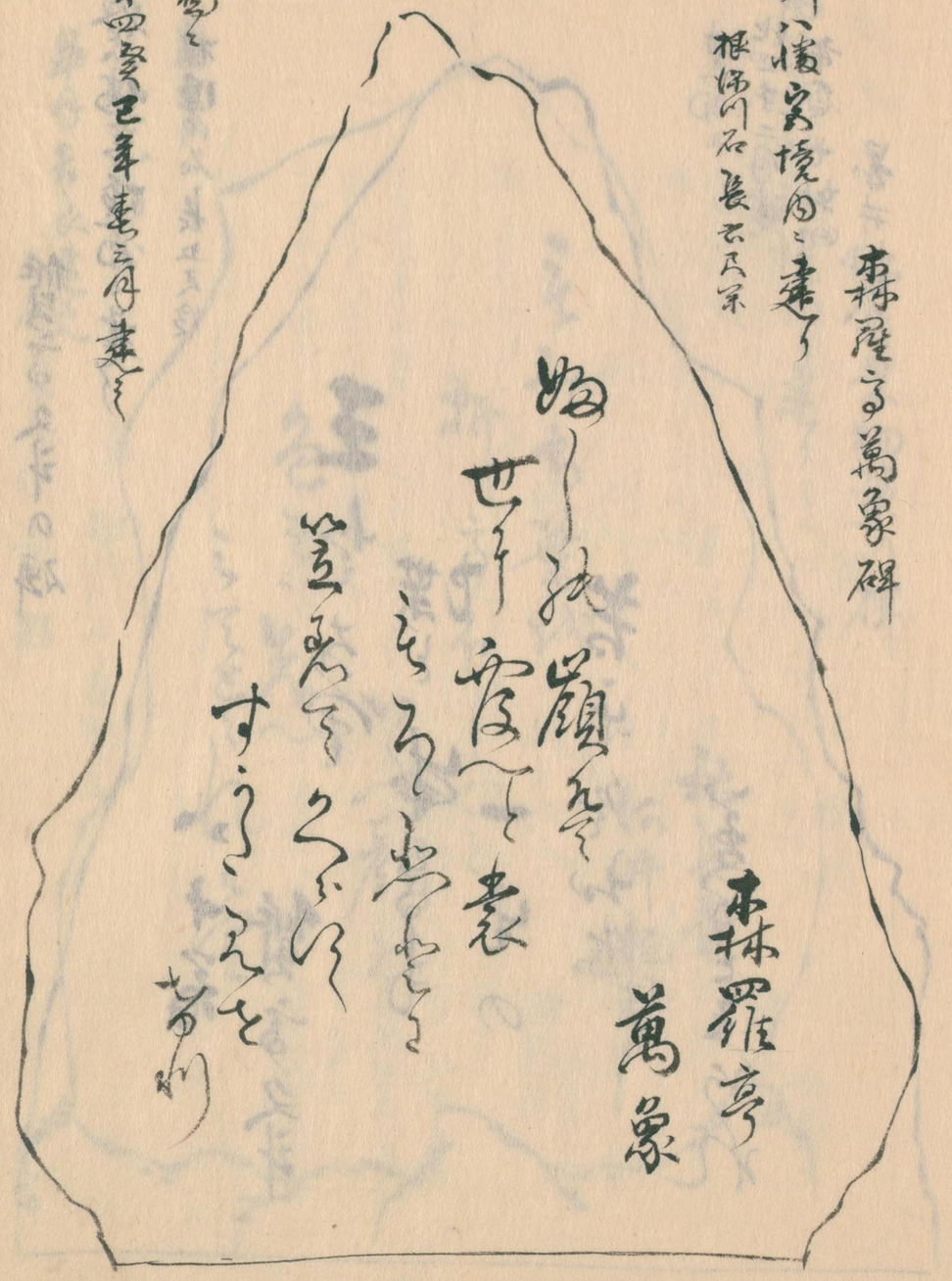
雨雲もろ〳〵来の碑

紫檀樓古喜の碑

添川百年町玄伝寺まで建つ
根岸川石まで地元の人建

森羅亭萬象碑

添川八幡宮境内に建つ
根岸川石長谷天宗



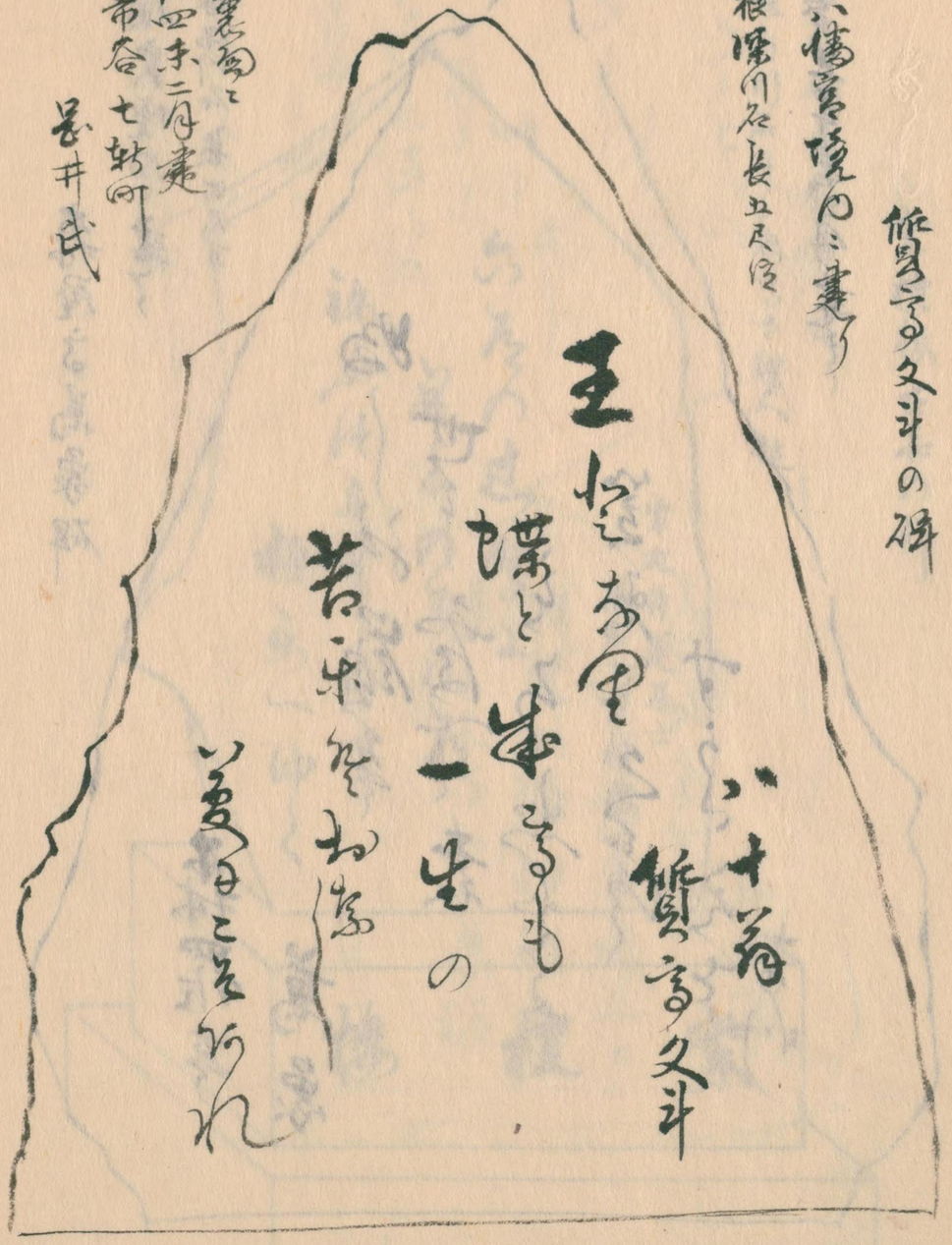
表面
天保四癸巳年春二月建之

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

賀古久斗の碑

市谷八幡宮境内に建つ

根張り石長五尺位



表面に

弘化四未二月建

市谷七軒町

吉井氏

八十翁 賀古久斗

主なき

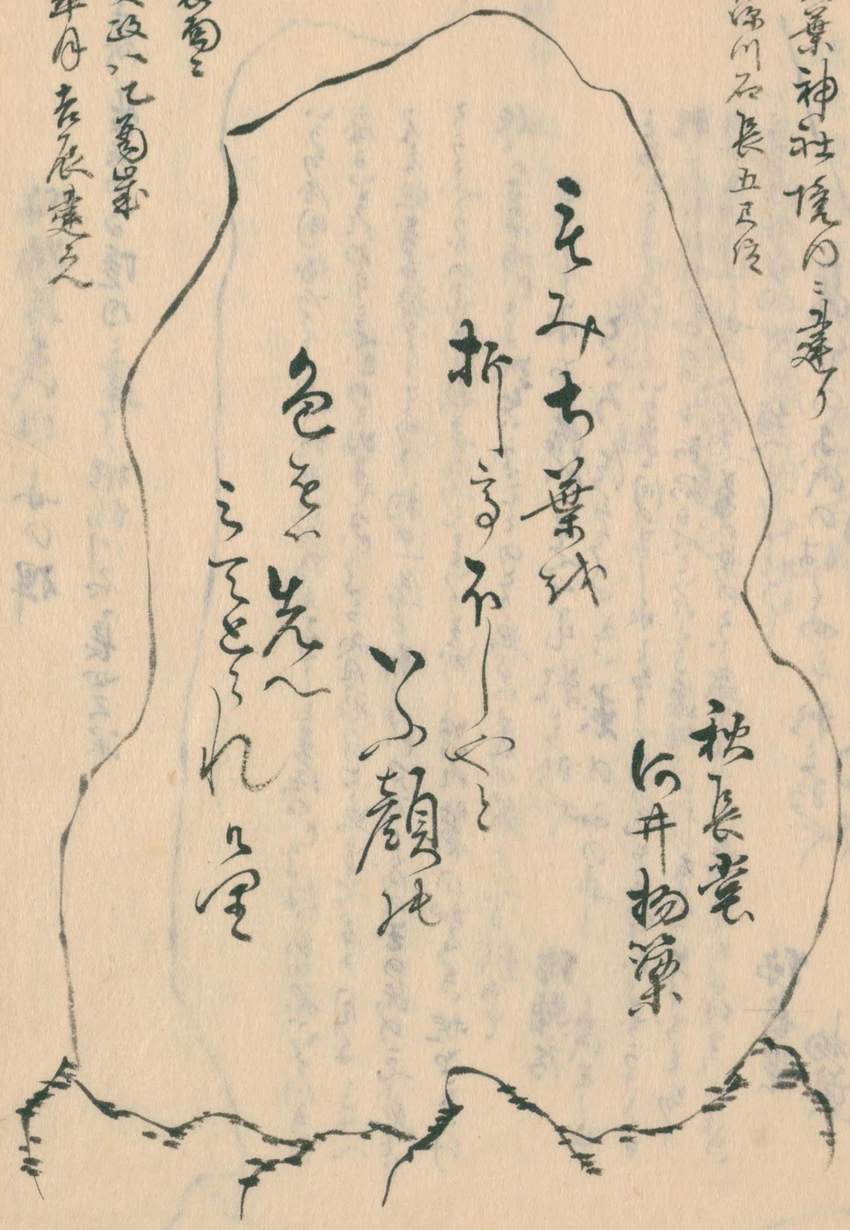
棲と

若干

未

一生の

美



御菓物菓の碑

向島姉葉神社境内に建つ

根張り石長五尺位

表面に

千時文政八乙酉歳

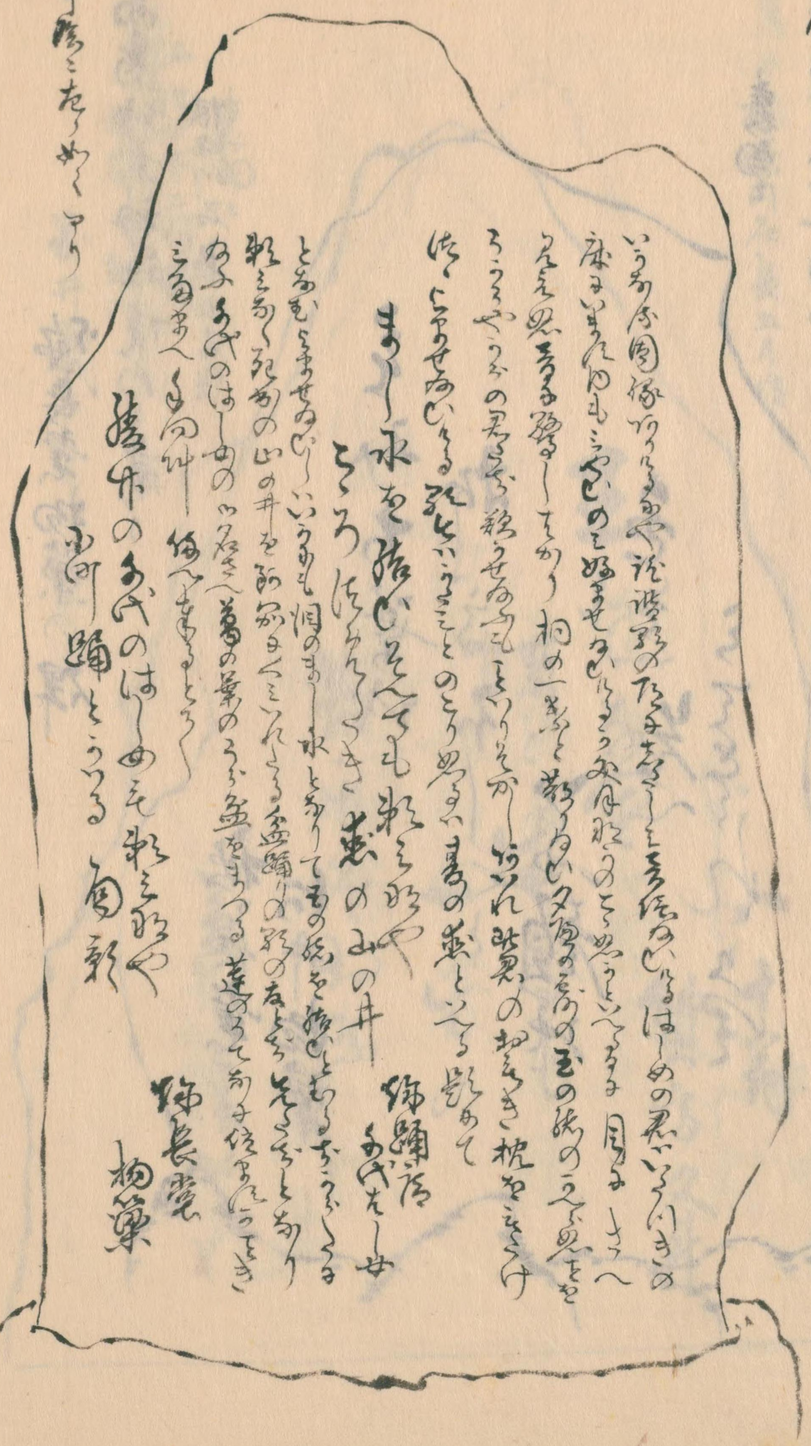
皐月吉辰建之

秋長堂

石井梅菓

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

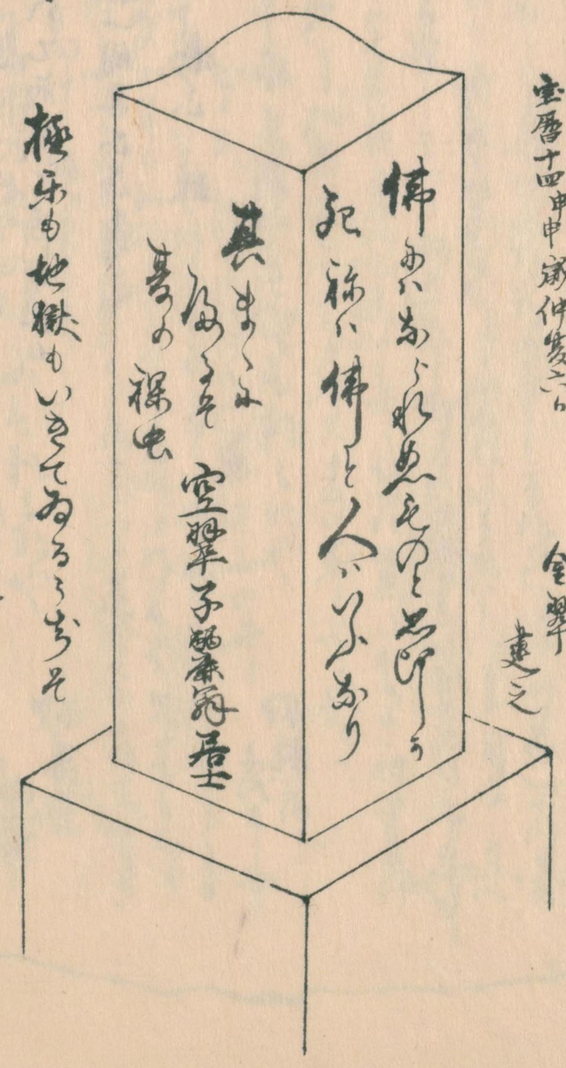
ガラス使用



志道軒の碑

向島柳島神社境内にあり
老圃存之等の四人の手跡
碑陰に次の五

寛政十四申年歳仲冬二日　東都演劇教人空翠篇
金翠　建之

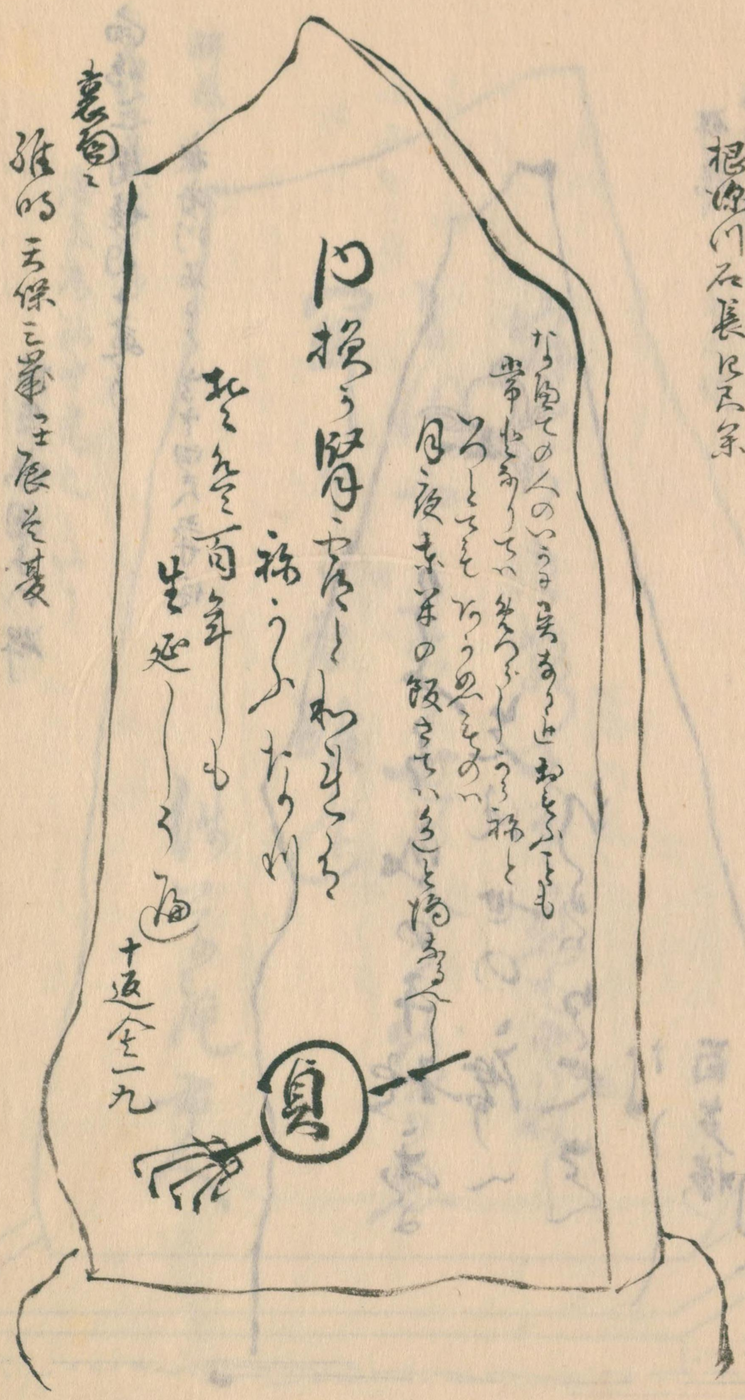


左の側に

極楽も地獄もいきてみるうちぞ
死ん後ぞめでたかるべき

十返舎一九の碑

向島堂寺いと長命する境内に建つ
根岸の石長比丘尼



なき人のいつまでもとゞまるよすがとも
常世ゆく人のたゞ一時立ちとまるしるべとも
月夜未草の咲きたる色を愛でゝ

四方の賀

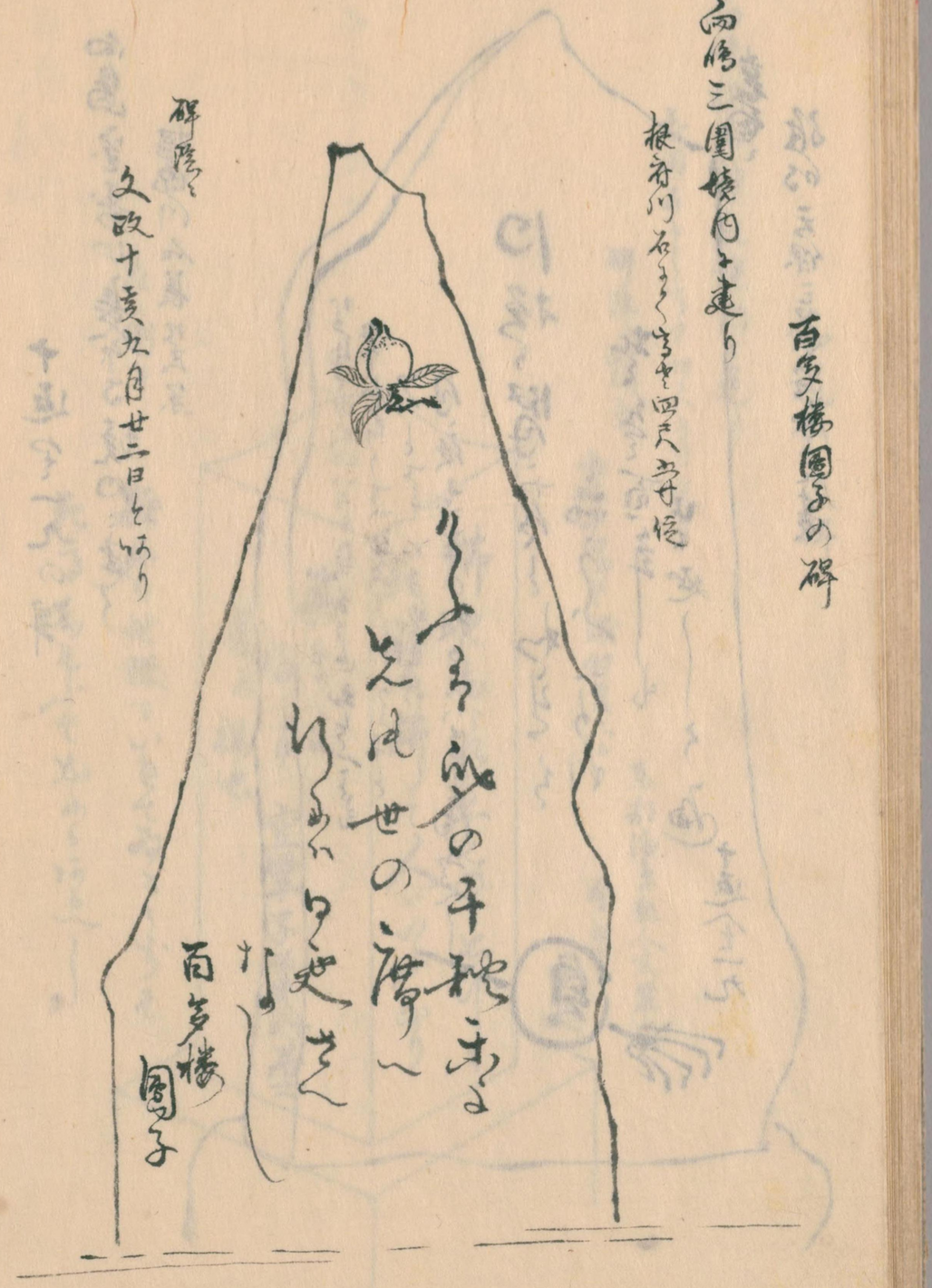
松竹鶴亀
千年万年
生延しやう

裏面

雅望
五保之筆主辰之夏

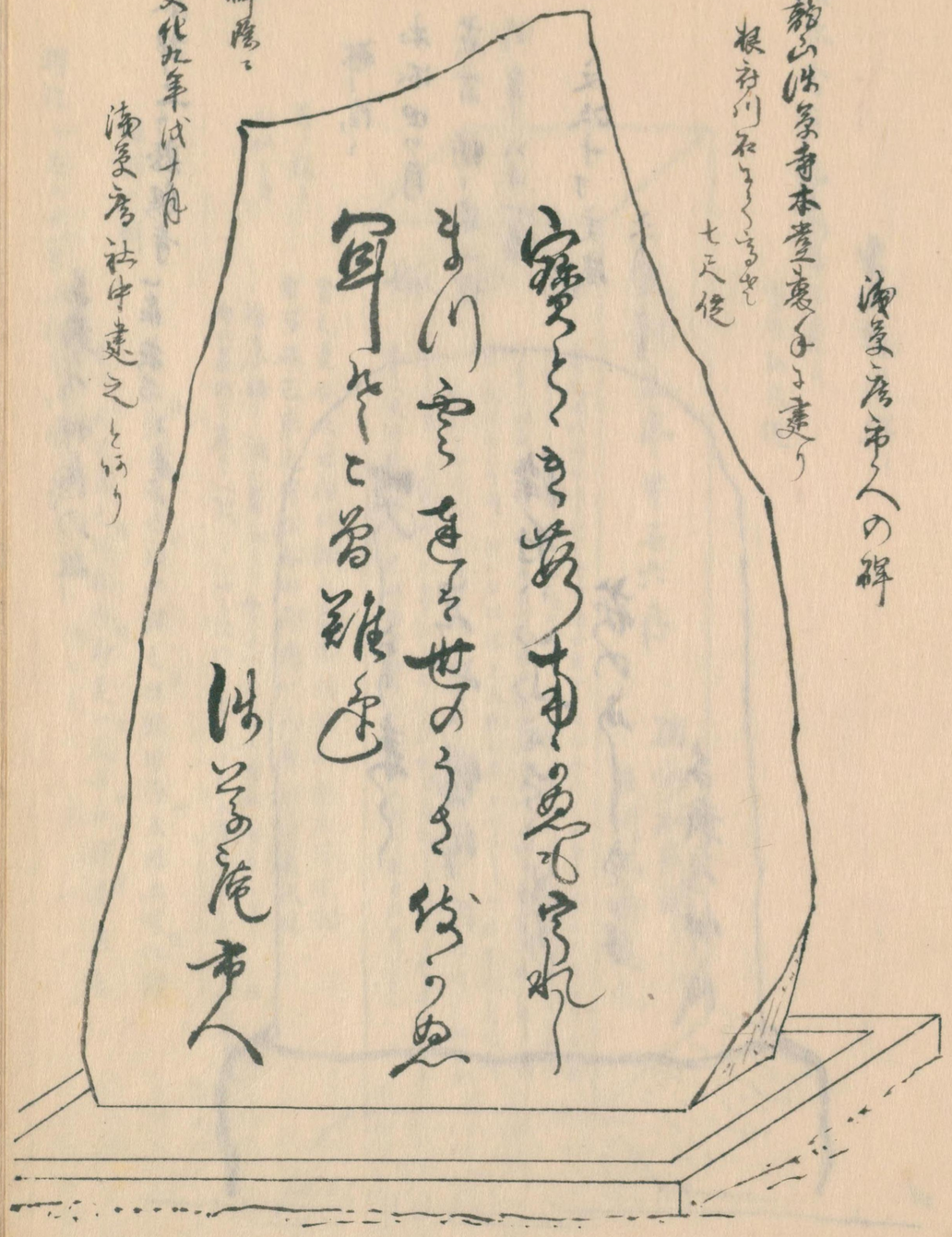
国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239
ガラス使用

百笑楼園子の碑



向島三圍境内之建
根岸川石くすく雪中四尺五寸餘

碑陰ニ
文政十壬寅九月廿二日ニ終ル



演笑居市人の碑

金龍山浅草寺本堂裏ニ有之建
根岸川石くすく雪中四尺餘
七尺餘

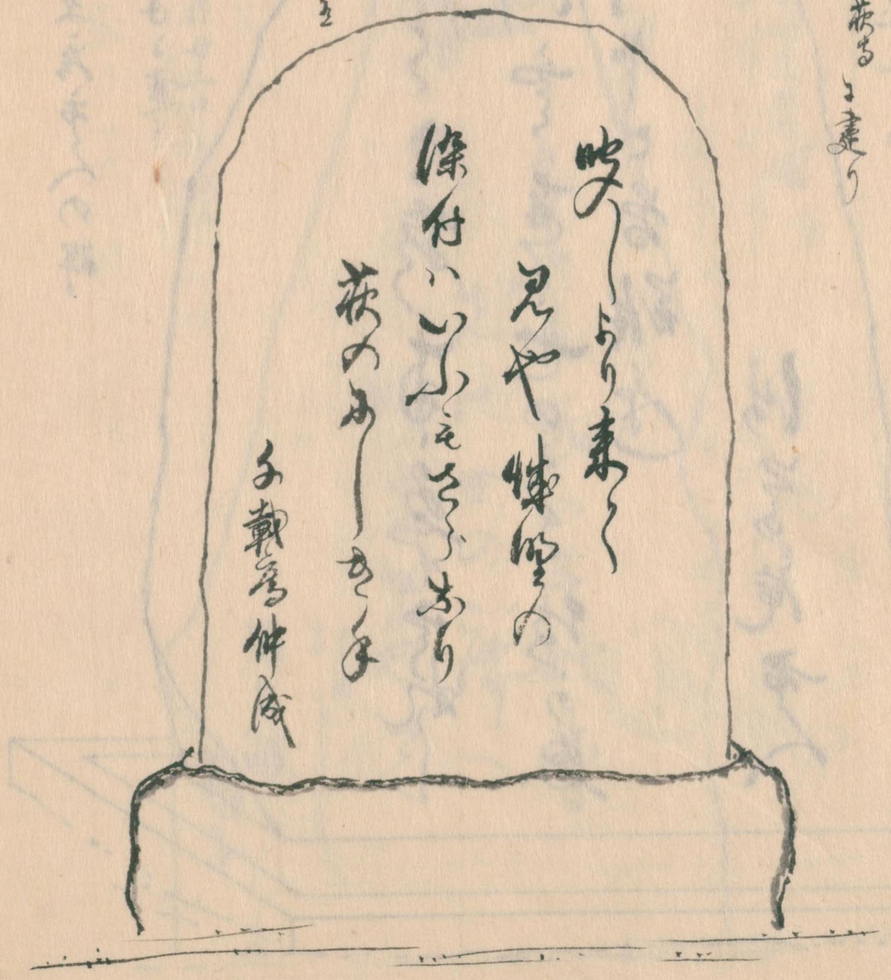
碑陰ニ
文化九年壬申十月
演笑居社中建之ニ終ル

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

多載高仲成の碑

和泉押上ノ郷報恩寺ニ在リ其ノ建ル所ナリ

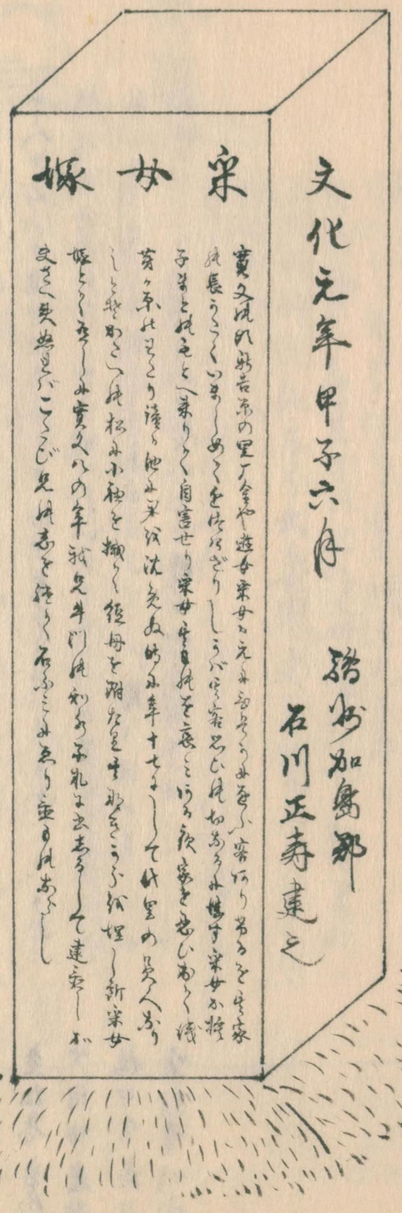
碑陰ニ
和泉四ノ目
荻窪 作ル所一信
ノ年 ノ年一歳
文政十丁亥歳
六月ノ建ル所



安倍娘ノ碑

和泉今ノ戸住 高田ノ建ル所

文化元年甲子六月

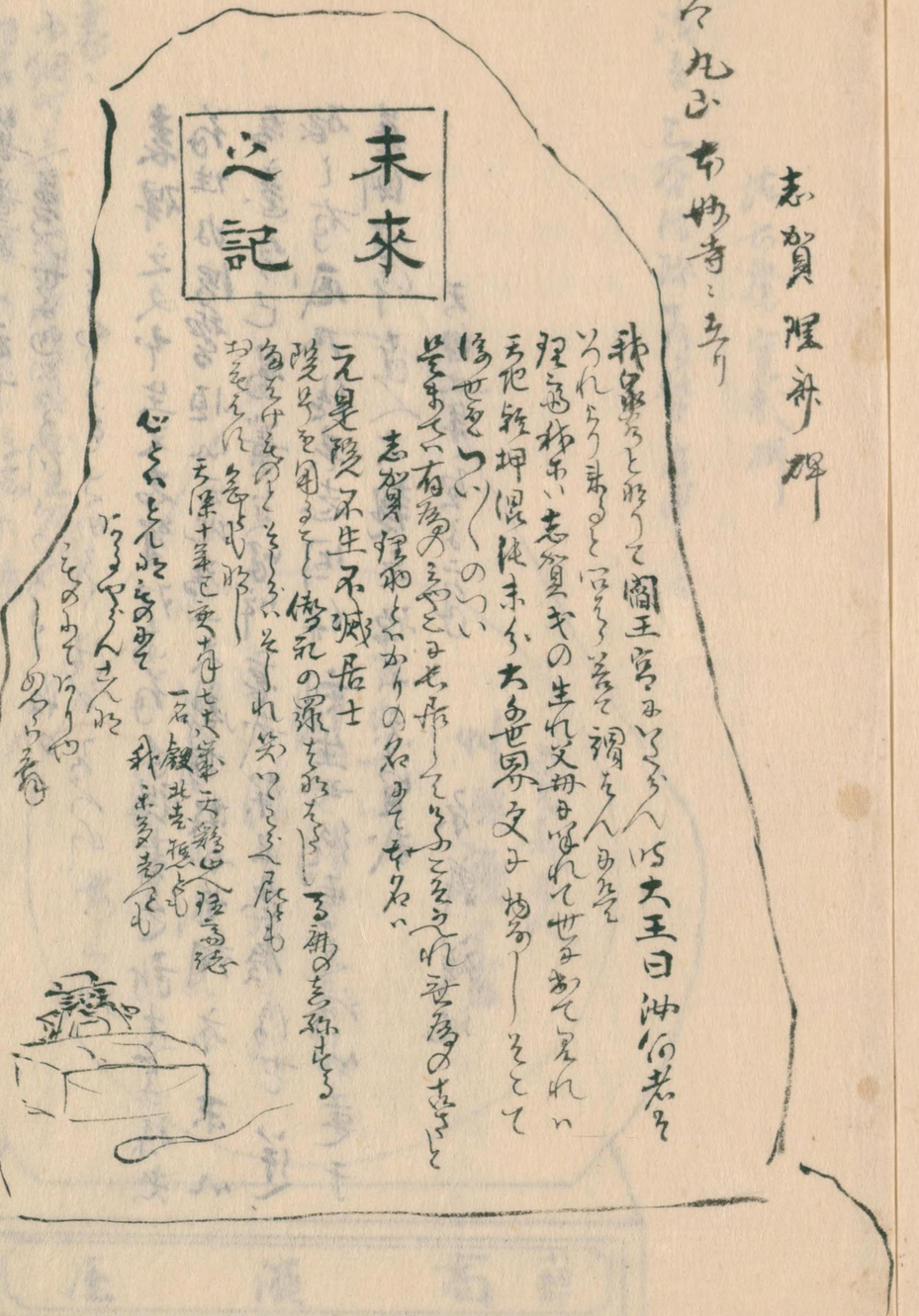


豊久須比郡吉原ノ里ノ金神遊女栗女ノ元ノ夫ノ
旅ニ行ケルマヽ帰ラザリシカバ栗女ノ
子ヲ生ムヲ待チ兼テ自害セリ栗女ノ
死スルヤ後ノ妻ノ子ヲ殺シ又ノ妻ノ
子ヲ殺シ

志賀理斐坪

未来記

未だ九ヒ市物寺こゝに



唯祐命寿長人
山林後 老芳
上龍多 花守
思峰多 招九
武甲多 東条
巣多多小松
立行志 高雪
峯松高 高風
声雅館 長雄
懐中舎 苑九
唯我書川雪

無量劫人神世
界の世ものうりうりねの
うやうやきめうやうやきの乃ち

表裡之文不生文志賀理乃翁多親書之新進子孫志
翁性好閑雅恒以天地為一大歌場故如是詞永未れ
為意今已易簀之時幷裏哉第四愚慶幸也 洋道
雅し有風乃徳真志田保刻生母終焉之詞れ連于
善例時幸連人大観之弥不亦宜哉

天保十年一月 日

系義識記

法名院寛哉

誠室 三谷松陰 乃哲 居士

裏ニ
小細町三角 家名高濱屋 三左衛門
松右四男船積制髪ニ而法名院
寛哉干時安政二年七月卒
明友同志ニ紫建ニ云

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

尚左堂後潤碑

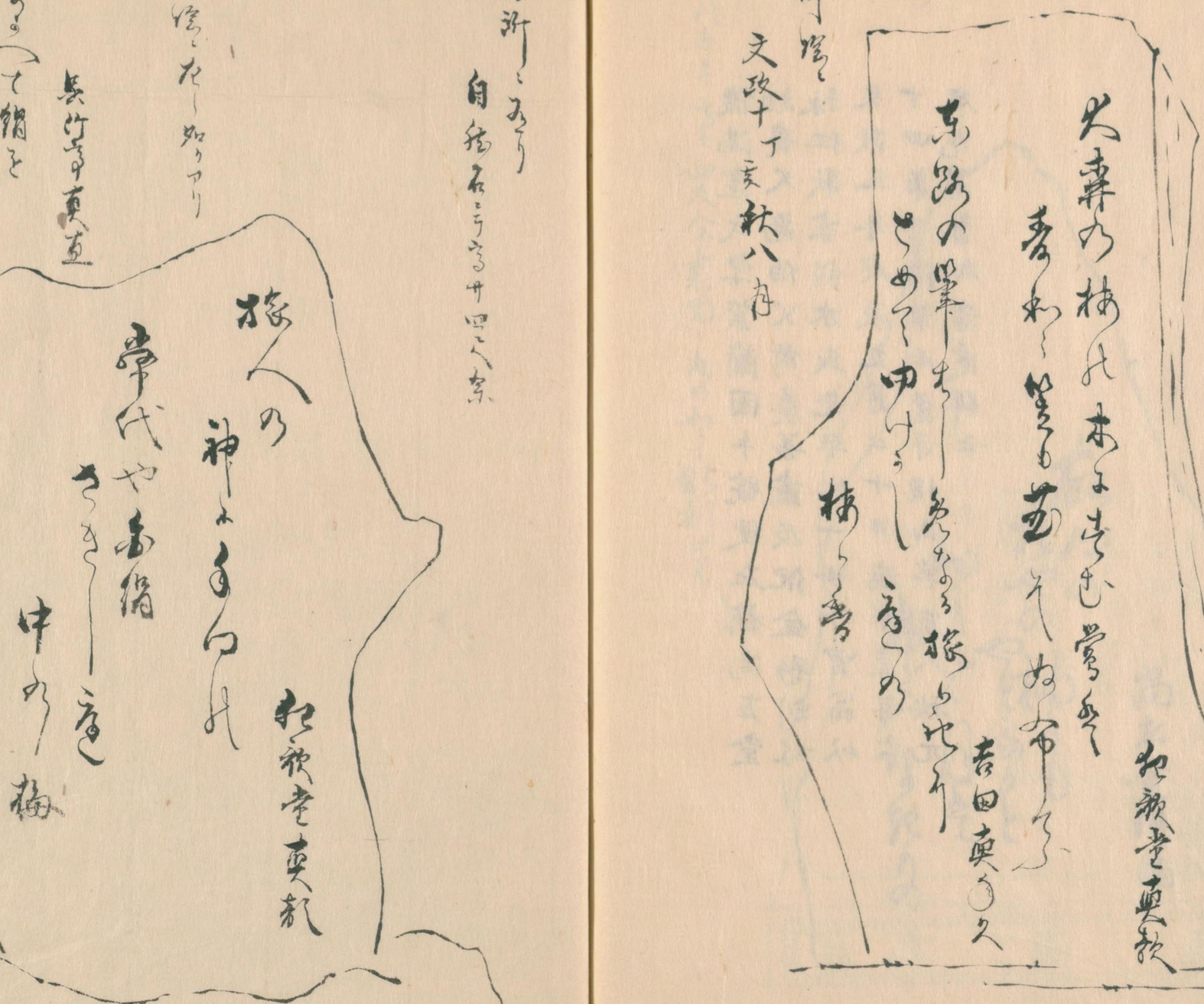
為飾郡寺為村夢渕宗法泉寺境の井の傍に建り

根深川石ぶみ　高さ四尺余表面に左の如く彫刻せり

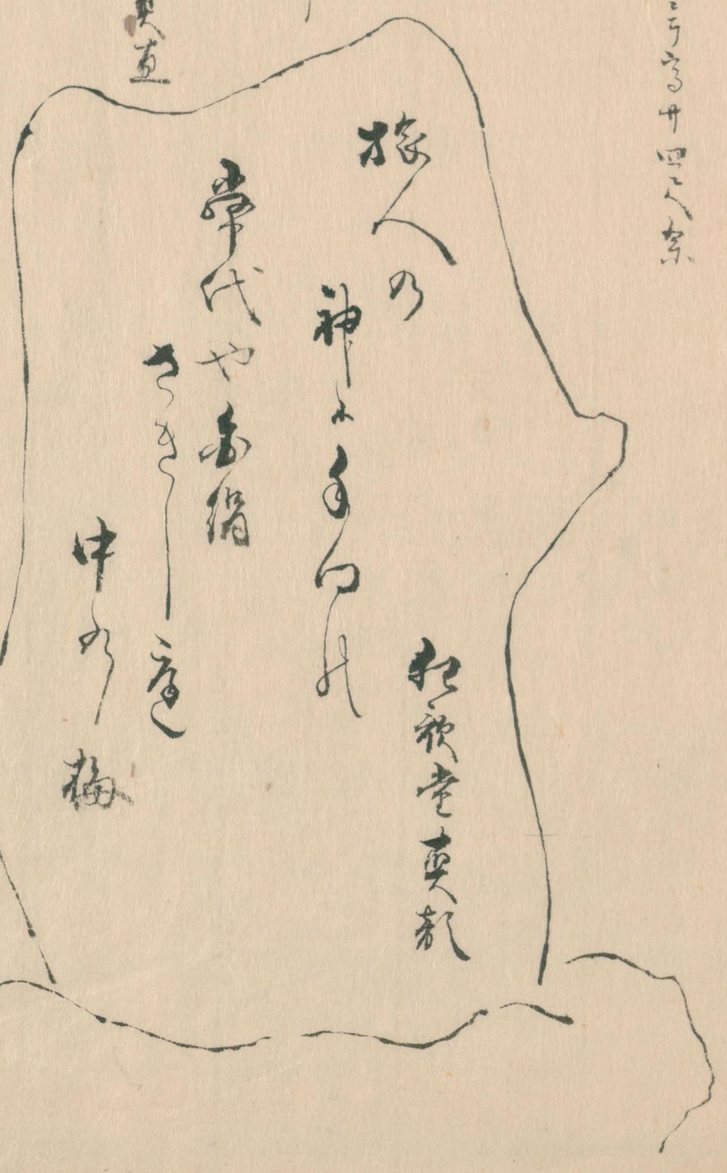
後滿窪氏字紫蘭固年腕便左橫尚左堂
幼喪父為伯父所養善畫及記金剛刻好
詠狂歌書鈴木氏先卒生一女一男嗣以
文政三年庚辰九月二十日病卒享年六
十四葬干淺草正覺寺後山其友人秋元
庵九募舊知者建碑云

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

薄田梅園にて
根府川 右三首廿三人衆



右一組
文政十丁亥六月



長竹中真道
桃李の下て 組を
幸く 連ても
家刀自の文
梅の香も
打ふくむ
木の花

大石許こゝろ
自称右二首廿四人衆

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239
ガラス使用

863
239

19804

国立国会図書館　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』 請求記号 863-239

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『苔の石ふみ狂歌の部』　請求記号 863-239

ガラス使用